

歯学部ニュース

令和7年度第1号（通算147号）



特集 入学を祝して
入学者のことば
歯学部生の活動

目次

特集1 入学を祝して	1
新潟大学歯学部長 井上 誠 医歯学総合病院副病院長（歯科総括） 多部田康一	
特集2 入学者のことば	4
吉岡 優奈・池内 花・齋藤 史菜・福井 智子・吉田 馨太・瀧澤 侑加・島村陽南子	
特集3 歯学部生の活動	10
歯学部生の今	
大畑 理恵・早瀬 大悟・藤川 悌也・丹 美咲子・宮倉 麻衣・小林 丈晃・棚邊 夏美 柏瀬 莉緒・上野 朋佳・桐生真依子・山口 栞・橋本 凜・亀井 恵莉	
歯学部運動会を終えて	23
山本 采奈	
部活動紹介	24
軽音楽部Liars（ライアーズ） 中塚 莉乃・InDeVO 川添 杏月	
研修医プログラムを修了して	26
歯周診断・再建学分野 大学院1年 小泉 瑠果・小児歯科学分野 大学院1年 本図 渚	
大学院へ行く	28
小林 雅・植田 優太・齋藤 瑠郁	
素顔拝見	31
松崎奈々香・上村藍太郎・小野 喜樹	
留学生紹介	34
Myo Maung Maung・Olenka Yomira VALENZUELA TORRES	
総務委員会だより	37
井上 誠	
教授に就任して	40
丹原 惇	
退職によせて	41
瀬尾 憲司	
診療室・分野紹介	43
包括歯科補綴学分野 教授 堀 一浩 生体組織再生工学分野 教授 泉 健次	
学会受賞報告	47
小田島あゆ子・Olenka Yomira VALENZUELA TORRES・岸本 直隆・沢田 詠見 辻村 恭憲・相澤 知里・板 離子・秋葉 陽介・長澤麻沙子・小野 喜樹・小林 水輝	
監物 新一技術職員 追悼文	58
大島 勇人	
新潟歯学会報告	60
竹原 祥子	
同窓会だより	62
加藤 幸生・小田島あゆ子	
ミニコラム	64
歯学部を支える方々 吉田 誠司・片桐 菜那	
教職員異動	67
編集後記	71





入学を祝して

新潟大学歯学部長 井上 誠

新潟大学歯学部歯学科、口腔生命福祉学科の新入生の皆さん、ご家族・保護者の皆様、この度のご入学、誠におめでとうございます。編入生を含む歯学科45名、口腔生命福祉学科24名の皆さんを新潟大学教職員一同、心から歓迎します。皆さんの前には、将来の歯科医療人、福祉専門職としての輝かしい道が開かれています。

新潟大学歯学部（歯学科）は1965年に東京医科歯科大学（現東京科学大学）と大阪大学に次ぎ、日本海側初の国立大学歯学部として東北大学、広島大学とともに設置されました。さらに、超高齢社会の到来にあわせて、2004年には日本で初めて保健・医療・福祉を統合的に思考できる専門家（歯科衛生士・社会福祉士）を養成する口腔生命福祉学科が設置され、今年で歯学部創立60周年を迎えました。

新潟大学歯学部が創立された当時は、「むし歯洪水」「歯科医師不足」と呼ばれ、歯科医師数を増やすべく、多くの歯学部が設置された時期でした。その後に歯科医師・歯科衛生士の養成が進んだことで、2010年に人口10万人あたりの歯科医師数が80名に達して歯科医師数の過剰が叫ばれるようになり（歯科医師需給問題）、全国の歯科大学・歯学部の定員が削減されて今日に至っています。その中で今年、日本は2025年問題という新たなターニングポイントを迎えようとしています。2025年は、戦後間もなくの1947年から1949年に生まれた世代（第一次ベビーブームに生まれた団塊の世代）が全員75歳以上を迎える年であり、社会の高齢化が加速するとともに、高齢の歯科医師が臨床現場を離れる時期を迎えることで、偏在化を含む歯科医師不足も進むことが懸念されていま

す。このような人口構造の変化の中で、歯科医療が果たす役割もまた変化を見せ始めています。それは、歯科医、歯科衛生士は単に歯を治すという職業ではなく、「歯と口は生活の質を維持するための重要な臓器である」という考え方のもとで、歯科医療従事者は「食べること」「話すこと」などの機能を支える専門家でなければいけないというものです。「健康寿命の延伸」は、歯と口の健康維持にも当てはまることであり、歯科医療に求められるミッションは多様化してきているのです。

歯学科の皆さんはこれから6年間、口腔生命福祉学科の皆さんは4年間で、基礎医学、福祉学、臨床歯科医学に至る幅広い学びを経て歯科医療、福祉のプロフェッショナルを目指すこととなります。新潟大学歯学部の教育目標は「包括的医療を行うことのできる有能かつ感性豊かな歯科医師の育成、歯科医学発展のために指導的な人材および保健・医療・福祉に貢献する専門職業人の育成」であり、「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。その中核をなすのが、Problem-based learning（PBL）であり、これまでのように与えられた教材の中で知識を身に着けるという学習方法とは異なります。PBLでは「学習の主体は学生である」という概念のもとに自らが疑問をもち、自らの手で学ぶこと（アクティブラーニング）を教育の主体としています。単なる知識や技術の獲得だけでなく、人間関係を構築する力や、自己管理、自己理解、課題対応力など汎用的な能力の向上と育成を促進することで、「学修者」としても「社会人」としても成熟していくのです。その道のりは決して平坦ではあ

りませんが、困難に立ち向かう中で得られる学びや気づきは、必ずや皆さんの財産となるでしょう。4月3日の入学式で学長から授かった新潟大学の理念である「自律と創生」、そして新潟のシ

ンボルである柳のようにしなやかで折れない「真の強さ」を身に着けて、学生生活が有意義なものとなるよう、充実した毎日を過ごしていただきたいと願っています。





入学を祝して

医歯学総合病院副病院長（歯科総括） 多部田 康 一

新潟大学歯学部にご入学された皆さん、心よりお祝い申し上げます。高校生活や受験期における皆さんの努力と、ご家族のご支援に深く敬意を表し、皆さんを新潟大学歯学部にお迎えできることを、大変嬉しく思います。

皆さんはこれから、歯科医学および口腔保健医療・福祉について学び、将来、歯科医療の専門職として、あるいは指導者・教育研究者として社会に貢献することが期待されています。そのためには、限られた修業年限の中で、知識・技術・態度のすべてにわたる膨大な学びが求められます。主体的に学び、自己管理と時間管理を徹底してください。これは、将来、医療専門職として社会に貢献するために不可欠な姿勢であり、習得すべき力です。

国立大学は、国民の皆さまからの税金によって支えられている公共性の高い教育機関です。新潟大学歯学部および新潟大学医歯学総合病院も、教育・研究・医療を通じて社会に貢献するという重要な使命を担っており、教職員はその責任のもと、皆さんの教育に真摯に取り組んでまいります。学生の皆さんにおかれても、未来の歯科医療人としての高い倫理観と社会的責任感を持ち、日々の学びに真剣に取り組んでください。社会から託された期待と信頼に応えるためにも、所定年限内での修了と国家資格の取得を確実に目指してください。

学年が進むと、医歯学総合病院において臨床実

習が始まります。本院では、教員の指導のもと、学生が実際の診療に参加する「診療参加型臨床実習」を実施しており、これは新潟大学に入学した皆さんだけが体験できる、非常に優れた学びの機会です。この体制は、患者さんのご理解とご協力、そして先輩方が誠実に準備し、真摯に診療に取り組んできた積み重ねのうえに成り立っています。この恵まれた環境の意義を理解し、責任ある姿勢で臨むとともに、その姿勢と学びの場を、次の後輩に受け継いでいってください。

医歯学総合病院の理念は、「生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成する」ことです。専門知識や技術に加え、共感力やコミュニケーション力といった豊かな人間性が、質の高い医療を支える礎となります。学びの場では、他者への敬意を忘れず、仲間や教職員との協働を大切にしてください。患者さん一人ひとりの立場に寄り添い、思いやりをもって接する姿勢こそが、信頼される医療人としての第一歩です。さらに、自由な時間も有意義に活用し、クラブ活動やボランティア、地域との交流などを通じて多様な価値観に触れ、広い視野と柔軟な思考を養ってください。その経験は、将来、患者さんや社会へと還元され、次世代の歯科医療を支える力となるはずですよ。

本学での学びが皆さんの人生を豊かにし、社会に貢献する医療人として羽ばたいていかれることを、心より願っております。

入学者のことば

入学者のことば

歯学科1年 吉岡優奈

入学してから早くも3か月が経ちました。入学した私たちにとって最初は新しい体験の連続でしたが、今は大学生活にも慣れて楽しい生活を送っています。入学当時、まだ同級生の名前すら知らなかった頃を思い返すと、今は仲良く話せる同級生のみんなとは別人のようで、なんだか不思議な気持ちになります。そう思えるほど、同級生のことをたくさん知ることができたのかと思うと、同時に嬉しく思います。今回「入学者のことば」を執筆させていただくにあたって、入学から今までを振り返り、感じていることを綴りたいと思います。

入学してから日々感じているのは、当たり前ですが一人一人が全く異なる人生を歩んできたのだということです。入学した場所は同じでも、第一志望だった人、そうでなかった人など一人一人が様々な背景を持っています。また入学生の中には新潟県出身の人もいますが、県外出身の人もたくさんいます。私も県外出身ですが、地元の異なる友達ができしたのは初めての経験でした。入学生は全国各地から新潟に来ているため、話しているだけで新たな発見がたくさんあります。友達とは、出身地や方言、高校生活など様々な話をして盛り上がりますが、友達の話のなかで新しく知ることでもあれば、逆に自分が当たり前だと思っていたことが友達に通じないこともあります。自分自身の話を共有しあうのはとても面白いですし、新たな発見が多く、世界が広がったように感じられます。まだまだ知らないことが多い同級生もたくさんいると思うので、たくさんの人と会話をしながら深めていきたいです。

同級生には尊敬することも多くあります。一年生の間は歯学部全員が顔を合わせるのは毎週金曜日のみで、「早期臨床実習」と「歯学スタディ・スキルズ」という授業があります。これらの授業では人前で発表する機会があるのですが、聞いている人に目を合わせ、堂々とした態度で発表することができる同級生が多いと感じます。私は発表が苦手で、自信のなさが目立ってしまうことが多いため、堂々と発表する同級生を見て憧れや尊敬の気持ちを抱きました。また、発表に対して質問や意見を述べたり、グループワークを円滑に進めたりする積極的な姿も印象に残っています。周りの同級生が真剣に物事に取り組む姿を見ると、自分も貢献したいという気持ちが大きくなります。このように高めあう関係を築くことが、学年の強みにつながるのだと感じました。

歯学部は少人数の学部であるため、他の学部と比べてより団結することができると思います。これから6年間の大学生活では、楽しいことも辛いこともみんなで経験することになります。同じ学問を学ぶ仲間同士、協力しあいながらみんなで頑張りたいです。最後に、これからたくさんお世話になる先生や先輩の皆様、6年間よろしく申し上げます。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 池内花

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科に入学して、あっという間に約3か月が経ちました。大学生は想像以上に毎日が忙しく、一人暮らしも初めは慣れないことばかりで大変でしたが日々模索しながら課題や授業をこなし、最近は充実した生活がで

きてきました。

新潟大学に入学して既に様々なことを学びました。

私は持ち前のコミュニケーション能力を活かし、歯科衛生士として将来たくさんの患者さんの精神的不安を和らげ、予防歯科を普及したいと志して歯学部口腔生命福祉学科の受験を決めたため、もともとは初対面でのコミュニケーションや新しく友人を作ることには不得意さを感じてはいませんでしたが、やはり「誰も知っている人がいない」という環境と「大学生になった」という自覚が緊張や不安材料となり、歯学部の新入生全体で行われたオリエンテーションなどでは、自分の思っているようにすぐに周りの学生と話したり、友人を作ったりすることはできませんでした。しかし、慣れない環境や難しい状況でも自分らしく多くの学生と接しコミュニケーションをさらに学んでいくことが重要だと改めて考え、自分から積極的に声をかけて友人を作ること、前に進むことが出来ました。

新潟大学歯学部では入学して早々に早期臨床実習が始まります。大学病院の様々な科を周り先生方からお話を聞いたり、実際に患者さんに行っている治療を見学したり、私たちが患者役になり六年生に診察してもらったりと、さらに歯学部生としての実感が湧く良い経験となりました。治療見学では、大学病院ならではの細かく分かれた各専門診療科を周り、主にどのような治療を行っているか、治療・診察する上でどのようなことを意識しているかなど歯科医療人の立場について多く学ぶことができました。患者役実習では、六年生に検診や染め出し、歯磨き指導、かんたんな記録の仕方などを実際に行ってもらい、患者さんの立場をより身近に体験し、これから先の4年間で自分がこうして成長できるのかという不安を感じるとともに、自分の思い描く歯科医療人となれるよう固い決意を持つことが出来ました。

新潟大学に入学し、新しい慣れない環境での学生間の関係性の構築、早期臨床実習を通じて感じたことは、大学とは様々な理由や目標を持ちながらも全員が同じことを学び、ともに同じゴールに向かって支えあい、時に切磋琢磨しあいながら成

長することが出来るとても刺激的で貴重な場であるということです。歯学部生として過ごすこの4年間を充実し満足のできるものにするために、これからも歯学部の仲間と様々な体験をし、それぞれの目指す歯科医療人になれるよう努力していきます。

大学生活という贈物

口腔生命福祉学科編入3年 齋藤史菜

新潟での生活も早いもので3ヶ月がすぎ、すっかりもも太郎アイスが美味しい季節になりました。今回で縁があって、「歯学部ニュース」の執筆の機会を頂き、ここに私がいた軌跡を、こうして言葉として記録できることに、心からの幸せを感じています。

申し遅れましたが、齋藤史菜と申します。私は23歳でこの学科に編入しました。大学院進学を見据えた決断でしたが、それは同時に、年齢や人間関係、新しい環境にうまく馴染めるかどうかという不安とも向き合う選択でした。寒さの中、1人で後期試験の受験に臨んだ自分を、今では本当に褒めてあげたいと思っています。

編入してすぐ、幸いにも同じ境遇の編入生が4人いて、自然と支え合いながら新しい生活を始めることができました。3年生のみなさんも驚くほど温かく、優しく私たちを受け入れてくださり、次第に不安は安心に変わっていきました。

大学生活は思っていた以上に密度が濃く、学びの機会にあふれていました。たくさんの施設見学、そして山のようなレポート。ひとつひとつこなしていくたびに、「これが大学生なんだ」と実感が湧いてきました。

また、サークルではなく“部活文化”というのも当初は驚きでした。入ろうかどうか迷いましたが、結果的に私は3つの部に入り、特に野球部ではマネージャーとして活動しました。最初は何も分からなかったスコアの書き方も、今ではしっかりこなせるようになり、自分でも成長を感じています。運動会ではパン食い競争に出場し、多学年との交流もでき、とても楽しい経験になりました。

た。部活に入ったことで5・6年生の先輩方とも自然に仲良くなれたのは、私にとって大きな財産です。

学びの面でも、挑戦の日々でした。PBLでは、慣れないスライド作りに苦戦しながらも、自分の考えをまとめて伝える力が少しずつついてきたように感じます。以前、働いていた経験もあり、社会保障について学ぶ授業は特に楽しく、イメージしやすかったです。

この学科は、勉強だけでなく、ボランティア活動や学外イベント、就職活動のサポートまで、本当に幅広く支援が整っています。そのおかげで、当初は大学院しか見えていなかった視野が大きく広がり、福祉現場や企業、さらには異業種への就職など、さまざまな道が見えるようになりました。専門学校時代には想像もしていなかった未来が、今、私の前には広がっています。

私がここで過ごす日々は、挑戦の連続であり、気づきと成長に満ちた時間です。そしてそれは、優しく迎えてくれた仲間や先生方、さまざまな機会を与えてくれた環境のおかげです。

この新潟の地で過ごす2年間は私にとって人生の財産となるでしょう。そして、これからここに入学する皆さんにも、自分らしい軌跡を残せる日々が訪れることを願っています。

入学者のことば

歯科矯正学分野大学院1年 福井智子



今年度大学院に進学し、歯科矯正学分野に入局いたしました福井智子と申します。今回「入学者のことば」の原稿依頼をいただき、学生の頃に「卒業の言葉」を執筆させていただ

たことを思い出しました。あれからもう2年近くの時が流れていくことに驚かされます。そしてこの2年間に、学生生活の6年間を超える、大きな心の変化と成長があったように感じます。学生の頃は歯科医師になることが第一の目標で、そのた

めにばかり行動していました。どんな課題をこなすにも、自分のためになるとは思いつつも、常にどこか受動的な一面が残っていました。

歯科医師国家試験に合格し、研修期間の前半は魚沼基幹病院に勤務させていただきました。患者さんを自分一人で治療するという責任感や、そのためにもっと努力できることはないかと向上心が強くなるのを感じました。また、円滑に仕事を行い病院に貢献するための工夫や、一緒に働く方々への配慮など、社会生活面も成長を感じました。何より、患者さんに「ありがとう」という言葉をかけていただけの幸福感を知り、この職業について良かったと感じる日々を過ごしました。

研修の後半には新潟大学に戻り、矯正歯科にて研修を行いました。半年ぶりの同期との再会では、おもしろい発見がありました。同じ学舎で6年を過ごした友も、気づけばこの半年のうちに違う方向を向いていて、それぞれの道を極めるための準備をしていたのです。環境や考え次第で歯科医師としての道は無限大に広がっていることを知りました。それぞれの選択を応援する気持ちと共に、自分は選んだ道の先で、どのような歯科医師になりたいのかを考えさせられました。大学院に進学した私は、どの道を選んだ人からも頼りにしてもらえそうな、プロフェッショナルになりたいと考えています。歯科矯正学分野にお世話になり始めてから、研修の半年間と入学してからの4か月が経ちました。1日1日を見ると進歩も変化もないように思われるかとしれませんが、毎日の学びの積み重ねで、今の自分はあの時の自分とは全く違うように感じます。この感覚を忘れず、自分が理想とする歯科医師像へと向けて、貪欲に学び続けていきたいです。

技工士とアカデミアの架け橋を目指して

包括歯科補綴学分野大学院1年
吉田 馨太



新潟大学医歯学総合研究科 包括歯科補綴学分野に入学しました吉田馨太と申します。この度、(第147号)「入学者のことば」執筆の機会を頂戴しましたので、僭越ながら筆を取らせて

いただきたいと思います。私は、2000年より有床義歯分野の歯科技工に従事し、25年余りの臨床経験を積んできた歯科技工士です。現在も大学院生として勉学に励む傍ら、新潟に本社を構える歯科技工所に従事し、臨床とともに、後進の育成、現場管理なども行なっています。ですので、在学中の多くの先生方とは異なる経歴を持つ社会人大学院生となります。

これまでの技工人生の中で、臨床家として考え行動することに、一定の誇りのようなものは持ってきました。一方で、補綴歯科学会に代表される学会などの場面、あるいは教育に携わる著名なアカデミアの歯科医師と直接関わる中で、それだけでは片手落ちであると気づかされることもしばしばありました。そこで、臨床に関わりながら、あらためて包括的に歯科医師目線で学び、加えて疑問に感じたことを中心に研究をする機会を設けることで、感じたそのギャップを埋めることができるのではないかと考え、大学院への進学を決意いたしました。

近年、歯科技工士が不足し、国民に安定して良質な補綴装置を供給できなくなる危険性、いわゆる歯科技工士問題が顕在化しています。これまでのキャリアで感じた本質的な問題点は、保険点数下での低賃金、それに起因する長時間労働などの環境要因、そして結果として起きている、高齢化と若年層の離職による深刻な人手不足などが代表例として挙げられます。その中で環境要因は私の手の届く範囲に限っては、仕組みを構築しマネジ

メントすることで一定の改善が見込めるようになりました。同時に、その改善が進んだことで、新たな課題も見えてきました。それは、補綴歯科における正しい教育の必要性です。歯科技工士の現場は、令和の時代においてもいわゆる職人のような徒弟制度の要素が強く、「やり方」ベースの指導方法が中心になりがち傾向があります。それに対し、クリニカルサイドにおいては、症例を分析し、症例ごとに向き合う大切さ、いわば、方法論ではなく目的論に近いところもあり、根本的な考え方の違いがあると実感しています。これが冒頭で述べたギャップのひとつでもあり、これを翻訳者として後進に伝えて行くことで課題解決、ひいては業界活性化の一助になるのではないかと考えています。

これからの大学院生活では、まずは医局の先生方にご指導を賜りながら学び、自身の糧とし見聞を深めていきたいと考えています。このような貴重な機会を与えていただいたことに感謝を忘れず、日々邁進していきたいと思っています。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年
瀧澤 侑加

このたび、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に入学いたしました瀧澤侑加と申します。本学口腔生命福祉学科(17期生)を卒業した当初は大学院進学など全く考えておらず、その後の心境の変化に自分でも驚いています。

卒業後は1年間、新潟大学医歯学総合病院で医療ソーシャルワーカー(MSW)として勤務してまいりました。MSWは、病気や生活に伴って生じる経済的・心理的・社会的問題に対して支援を行う専門職です。病院内の多職種との連携はもちろんのこと、地域の医療機関や行政、福祉施設などと連携・調整を図る必要があるため、幅広い知識と柔軟な対応力が求められます。実際に業務にあたる中で自分に足りない点の多さに直面し、思うようにいかないと感じることも少なくありませんでしたが、患者さんやご家族から感謝の言葉を

いただけたときには、大きなやりがいと達成感を感じました。

福祉専門職の道へと進み、福祉の仕事にやりがいを感じる一方で、学生時代に学んだ歯科分野との関わりが次第に薄れていくことに、どこか寂しさを感じるようになりました。そのような折、医科の現場ではソーシャルワーカーの存在が比較的広く認知されている一方で、歯科医療の現場ではその役割が十分に浸透していないのではないかと、という疑問を抱くようになりました。今後はさらに高齢化が進むため、歯科医療現場にも複雑な社会背景を抱える患者さんは増加すると予想されます。こうした背景を踏まえ、歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンスを活かし、歯科医療におけるソーシャルワーカーの意義を見出したいという思いから、歯科専門の病院へMSWとして転職する決断をいたしました。

その過程で、研究活動にも関心を持つようになりました。これまでMSWの研修会や学会に複数参加しましたが、先輩方の発表を通じて実践に活かせる多くの学びや新たな視点を得ることができました。私自身も、歯科医療におけるMSWという視点から専門性をさらに深め、実践と研究の両面で貢献できる人材を目指したいと考えるようになりました。歯科と福祉、両分野の知識をさらに深め、研究に必要なスキルを学べる場として、大学院進学は最適な選択肢であると確信しています。自らデータを収集・分析し、修士論文を完成させることは、自信と成長につながる貴重な経験になるはずで。

転職、そして大学院進学と、この1年間で大きな決断を重ねましたが、いずれも自らの専門性を高め、よりよい支援につなげたいという思いからの前向きな一歩です。地域のソーシャルワーカーの一員として貢献できるよう、大学院での学びを有意義なものとし、充実した時間を過ごしたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

博士後期課程に進学して

口腔生命福祉学専攻博士後期課程1年
島村陽南子

口腔生命福祉学専攻博士後期課程に入学しました島村陽南子と申します。このたび、「入学者の言葉」を執筆する機会をいただきましたので、博士前期課程および博士後期課程への進学の経緯や現在感じていること、今後の展望について述べさせていただきますと思います。

私は本学の口腔生命福祉学学科を16期生で卒業後、博士前期課程を修了し、この春から博士後期課程へ進学いたしました。博士前期課程に進学した理由は、明確な目標があったから、というよりは、将来がはっきりと見えていなかったからです。学部3・4年生の時には、企業の説明会に参加したり、歯科医院に見学しに行ったりもしましたが、営業職の自分や臨床の現場で働く自分の姿が想像できず、将来に対する迷いや不安がありました。

その中で、学部のPBLや講義を通じて、発表をしたり、意見を交わして考えを深めることに面白さを感じ、「研究をやってみたい」と漠然とした思いが芽生えました。また、コロナ渦で経験できなかった学生生活への心残りや新潟への愛着もあったかもしれません。

博士前期課程では、学部からの同級生たちもおり、課題の締切前には励まし合ったり、情報を共有したりと、心強い存在でした。大学院生室で会えると嬉しかったです。しかし、博士後期課程に進み、学部から一緒だった同級生はいなくなってしまう、少なさみしさを感じているところです。

博士後期課程へ進学した理由には、前期課程での学びや経験が充実していたことがあります。調査に関わるなかで、先生方と一緒に様々な経験をすることができ、「もっと挑戦してみたい」と思うようになりました。また、学会発表で富山や北海道に行けたことも、とても貴重な思い出となりました。

現在は、博士前期課程で収集したデータをもとに分析を進めています。なかなか思うような結果

が出ず苦戦することもあります。分析や論文執筆を着実に進めるため、先生方と定期的に打ち合わせをしながら取り組んでいきたいと考えています。

博士前期課程2年目からは、都内の自治体で歯科衛生士として勤務しています。大学院と業務、それぞれで学んだことが将来的に相乗効果を生み、うまく掛け合わせて生かせたらと思っています。

今後の展望については、まだ明確なビジョンがあるわけではありません。数年後、50代の自分も、正直なところ想像が付きません。今は、目の前の仕事や分析を着実に取り組みながら、職場の

歯科衛生士の働き方を見つつ、将来のモデル像を模索していきたいと考えています。新潟での学会で、卒業生の先輩方とお会いできたことが印象に残っており、行政で働く歯科衛生士の先輩方とご飯を食べながら情報交換が出来るような繋がりを持てたらうれしいなと密かに思い描いています。博士後期課程では、ご指導を頂きながらも自発的に取り組み、打たれ強く分析や論文作成を進めていきたいと考えています。大学院での経験や学びを通して、歯科衛生士として自分の在り方を少しずつ形にしていけたらと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



歯学部生の今

歯学部生の今

歯学科2年 大畑理恵

入学してから一年半が経とうとしている今、このように振り返る機会をいただけたことで、これまでの大学生活を見つめ直す良いきっかけとなりました。今回は、これまでの大学での生活を振り返りつつ2年生としての生活の中で私が感じていることを書いてみたいと思います。

まず、1年生の頃とは違い、歯学部生としての自覚が強くなってきたと感じています。1年生のときは五十嵐キャンパスで教養科目を中心に学んでいたため、歯学部生であるという実感を強く持つことは正直あまりありませんでした。しかし2年生に進級し、旭町キャンパスでの生活が始まってからは、毎日朝から専門的な授業を皆で受け、学ぶ内容もより実践的で難しくなり、聞いたことのない単語が続く授業についていくことに必死な毎日です。歯学部って細胞より細かいところも学ぶんだ…こんな細かい骨まで覚えるんだ…こんなに材料に種類があるんだ…という勉強の範囲の驚きから、どのように勉強すれば身につくのか、どこが大切なポイントなのかという勉強の方法の迷いまで、全てわからないが故に手も付けられない状況に何度もなりました。そして大変なその分、歯学を本格的に学んでいるという実感が強くなりました。日々学んでいる知識が、国家試験・そして歯科医師となった後にも直結するものであるため、自然と気が引き締まり、「なんとなく勉強することではできなくなり、緊張感を持ちながら、患者さんの生活の質を高め笑顔を生み出せる歯科

医師になるという目標を見失わないように生活しています。

しかし、テストや課題に追われ、家事に部活にバイトにと、毎日があっという間に過ぎてしまう生活の中で心が折れそうになる瞬間もありました。そんな時にも頑張れたのは一緒に頑張る友達と励まし合いながら切磋琢磨して学び進めることが出来たからです。今までの環境とは違い皆が同じ目標に向かって努力している環境のため、勉強をする友達の姿に奮い立たされる毎日でした。引っかかっているポイントを聞けば誰かが教えてくれて、図書館に行ったら誰かが勉強していて、休み時間には勉強方法を共有して、勉強の辛さを共有して…そんな環境だからこそ頑張れたのだと今振り返って思います。

これから先、より実践的な内容や実習も増え、忙しく大変な日々が待っていると思います。ですがそんな時にも、患者さんの笑顔を生み出せる歯科医師になるという目標を見失わずに、今やるべきことを着実に積み重ねていきたいです。そして、そんな大変な中だからこそ、一緒に頑張る仲間をこれからも大切にし、支え合いながら前に進んでいきたいです。

また、勉強だけではなく部活や友人との息抜きの時間なども、私にとって大切な大学生活の一部です。勉強とそれ以外の時間をうまく切り替えながら、どちらも大切にし、歯学部生として充実した日々を過ごしたいと思います。まずは今夏休みに入り、夏休み明けの怒涛のテストに向けて、生活リズムを崩さず勉強に手を抜かない日々が送れるように頑張ります。

歯学部生の今

歯学科2年 早瀬大悟

この度、歯学部ニュースの執筆を拝命いたしました、歯学科2年の早瀬大悟と申します。2年生に進級し、旭町キャンパスでの新しい生活が始まって約4か月が経ちました。ここでは、私が日々の生活で感じたことを拙筆ながらご紹介いたします。

2年生になってからは、日々の忙しさに拍車がかかっていると感じます。というより、1年生の頃にのんびりと過ごすぎているのかもしれない。専門性が高く、高度な内容の授業とミスの許されないテスト。1年生の頃は何となく聞き流していた、「今のうちにたくさん遊んでおくんだよ。」という先輩方の言葉が、今ではしみじみと心に染みます。夜は居酒屋のアルバイトで慣れない接客に悪戦苦闘し、大学から始めた軽音楽では、自分の実力を少しでも高めていくために毎日欠かさず練習を続けています。予定の詰まったスマホのカレンダー。1週間、1ヶ月とあっという間に時が過ぎ去っていき、気が付けば夏休みに入ってしまった。この原稿も締め切り当日に執筆するという愚行に走っています。なんだか、ただただ私に計画性がないだけのような気がしてきましたが、とにかく、学業・アルバイト・部活動のすべてに全力で取り組む毎日は忙しくも充実しています。

でも、ふと立ち止まると「本当にこれでいいのか」と思うときがあります。自分は忙しさに流されているだけではないか。本当に歯科医師になりたい自分は、今ここにいいのか。そんな問いを心

の奥の自分がそっと投げかけてくるのです。

そんなとき、部屋に置いてあるラグビーボールに久しぶりに触れると、不思議と昔の記憶がよみがえってきました。そして思い出したのです。忘れていた初心を。歯科医師を目指そうと決意した想いを。

高2の冬、ラグビーの試合中にタックルをした際に相手の膝が私の下顎を直撃し、顎を同時に2ヶ所も骨折しました。年末で多くの病院に受け入れを断られる中、自治医科大学附属病院の口腔外科の先生が「大丈夫、引き受けるよ」と言ってくださったのです。地獄に仏とは正にこのことだと思いました。その後の手術も含めて、親身に対応してくれた先生の姿に私は憧れたのです。「自分もこの先生のように困っている人を助けたい」その想いが私を歯学部受験へと向かわせました。先生は受験の時も相談に乗ってくださり、合格したときは「おめでとう。歯科医師として待ってるよ。」と声をかけてくれました。あの時の温かさは今でも忘れません。私がこの歯学部で学んでいる原点はこの想いだったのです。

これからも忙しい毎日は続くと思います。しかし、あの日の初心を思い出した今、同じ景色が少し違って見えています。歯科医師になりたいという願いが自分の中で再び強い光を帯びてきたのです。夢は決して簡単に叶うものではありませんが、仲間たちと励まし合い、ときに悩みながらも少しずつ前に進んでいきたいと思っています。患者さんの不安を取り除き、笑顔に変えることのできる歯科医師を目指し、今ここで学んでいるすべてが未来の力になると信じて、これからの日々を大切に歩んでいきたいです。

歯学部生の今

歯学科3年 藤川 悌也

解剖がしんどい…

この度は歯学部ニュースの執筆という貴重な機会をいただきましたので、3年生前期を大まかに振り返るとともに、将来医療人として携わっていく、自分自身の現状を見つめ直したいと思えます。

まずは、冒頭でも触れたように、解剖学実習の大変さについて述べます。3年生の4月から7月中旬の約3か月半にわたる解剖学実習は、先輩から聞いていたよりもハードで、心身ともに疲れを感じるものでした。先輩からは口頭試問が大変だと聞いていましたが、実際には解剖そのものが最も難しかったです。もちろん手先が器用であったり、技術、知識というバックグラウンドによって左右されると思いますが、自分とはとにかくメンタル勝負だったかなと思います。特に、後半は怒涛の勢いで進めたため、火曜と木曜の午後が息つく間もなく過ぎていきました。また、自分たちは学年としての人数も少なく、一班当たりの人数も少ないため、実際に課されるタスクは並み以上であったと思います。ただ、その中で班員と協力しながら学び、実践していくという行為はまさしく学問の理想像だったと思います。事実、4月当初と比べると格段に班員との仲も深まりましたし、インストラクターの先生との距離も近づいたと感じています。協力しながらご献体を解剖させていただくことで教科書などから得た知識との統合が

でき、とても良い勉強になりました。自分が思っている以上に人体の構造は緻密に制御されていて進化論における、ホモサピエンスの進化過程で、これほど精密な構造が成立するのかと疑問を抱くほどでした。最後まで丁寧にご指導とご鞭撻していただいた先生方には、本当に感謝しております。

自分にとって3年生というのはある意味で一番大事な学年だと思っています。というのも6年間という学生生活で考えたときにこの学年までがのびのびと学べる学年だと思うからです。先輩を見てきて、4年生と3年生というのは一年間という期間では表しきれないほどの差があると思います。4・5・6年生はすでに‘歯科医師として働く’気概を感じるからです。もちろん3年生の後期から専門的な勉強が始まると聞いていますが学年が上がれば上がるほどそれはより臨床的になっていくので自分にとってそれはまさしく歯科医師としての勉強をしていく学年だと思っています。この学年は医療人としての基本的素養をしっかりと身に着ける最後の学年だと思っています。それゆえにいい意味で歯科医師という職に縛られずにのびのびと勉強できる最後の学年かなと感じています。自分は今の医療は全人的医療がコンセプトであると思っており、それは必ずしもその分野に精通したからといって成し遂げられることではないと思います。専門知識を裏付ける医療人としての人間性、コミュニケーション能力などの素養が欠かせないと考えます。そのためにも今の勉強、時間をより有効に活用し、後期からの学びにも全力で取り組みたいと思います。

歯学部生の今

歯学科 3年 丹 美咲子

気づけば夏休みが目前まで迫ってきています。日々、一つの試験が終われば次の試験と追われているうちにここまで来たように感じます。今回、このような機会をいただき、拙い文章ですが「歯学部生の今」について、自己紹介、3年前期の授業、所属している部活動の順に書いていきたいと思えます。

出身は秋田県です。同じ日本海側に位置し、羽越線一本で往来できる新潟には子供の頃から親しみを感じていました。実際に暮らしてみると、全然違うと感じる部分も多々あります。秋田と新潟のお米の味の違い、吹く風の強さ、そして想像以上の夏の暑さには驚きました。新潟大学は私にとって2つ目の大学です。最初の大学では、コロナ禍だったこともあり、思い描いていた学生生活とはかけ離れた日々を送っていました。当時と比べると、今はとても大学生らしい充実した毎日です。感染対策は現在でも続いています。授業は全て対面で受けることができます。ありがたいことです。

次に3年前期の授業についてです。去年は基礎医学中心の座学がほとんどでしたが、3年生になってからは専門である口腔に関する授業がぐんと増えました。3年前期のメイン科目はやはり人体解剖学実習です。4、5人で1グループとなり、それぞれの班でご献体を解剖します。解剖学の知識を持ったうえで、手順に従って解剖を進め

ることが必須で、とても体力を使う実習です。実習終了後は心身ともにへとへとに疲れます。人体の構造を明らかにし、解剖の手順を確立させた先人たちの努力には頭が下がります。そして何より感動したのは人体の、芸術とも言える美しさでした。献体してくださった方々とそのご遺族には感謝しかありません。ありがとうございます。

私は江戸千家茶道部に所属しています。活動日は毎週木曜日、医歯学部合同です。先輩方はとても親切でよく面倒を見てくださり感謝しています。茶道部では年に2回、夏と冬にお茶会が開かれます。弛まず丁寧に日々のお稽古に取り組むことで作法が身についていく感覚は、生活にも学業にも通じるものだと感じています。勉強も、毎日コツコツと進めることでしっかりと定着できるように、と思うのですが、なかなか難しく、いつも試験直前に焦ってばかりです。茶道部は部員募集中です。少しでも興味がある方はぜひ見学にいらしてください。お茶をいただく時は、日常から離れた優雅な落ち着いた時間です。このひとときを是非とも体験してほしいと思えます。

夏休みが明けると(昨年もそうでしたが)試験期間が始まってしまいます。試験のことを考えると今から気が重いというのが正直な気持ちです。直前暗記を苦手とする私は、今から少しずつ試験勉強を始めるしかありません。

最後になりますが、少し年上ながら、人見知りの私と仲良くしてくれる同期と茶道部の皆様、熱心に指導して下さる先生方、再受験を応援してくれた家族と高校時代の恩師に心から感謝申し上げます。

歯学部生の今

歯学科4年 宮倉麻衣

大学生活の折り返し地点である4年生になり半年が経過しました。口腔病理学、口腔外科学、有床義歯学など昨年よりもさらに具体的で専門性の高い内容の授業を多く行っています。一年後に控えるCBTやOSCEに向けて、知識を蓄えるだけでなく臨床を意識して学ぶことを大切にしています。

口腔病理学では、臨床所見や病理組織所見、X線所見から疾患名を診断し、その疾患の特徴や原因、治療法などを考える症例検討を行ってきました。病理組織所見などが類似していることにより鑑別が難しい疾患もあり、全ての情報を総合して、重要な所見を見落とさないよう意識して行いました。しかし、先生の解説を聞くと自分の考えが足りていなかった部分もあったため、今後も復習していきたいと思いました。

有床義歯学では座学と並行して欠損補綴学の実習を行っており、全部床義歯を製作しました。無歯顎模型の印象採得から始まり、個人トレーや咬合床の作成、人工歯排列や歯肉形成、埋没、重合を経て、現在は研磨を行っています。最初に行う印象採得では印象体に気泡が入ってしまうことが何回もあり、とても苦労しました。人工歯排列では先生のアドバイスをもとに、mm単位のズレを修正しながら審美性や機能性の良い排列を目指しました。とても細かい作業が多く、集中力が必要であったため大変でしたが、やり切ることができたと思います。

歯科矯正学は、自分が歯科矯正をしていたときに疑問に思っていた、矯正で歯が動く仕組みや抜歯・非抜歯の理由などを学ぶことができ、とても

有意義な授業でした。トレー実習ではセファログラムを用いて骨格や歯をトレースし、その位置関係を角度的に分析するという作業を体験しました。特にSNA角やSNB角、ANB角などの計測を通して、骨格性の不正咬合の診断において数値の持つ意味を体感できたことは、大きな学びでした。

授業や実習をこなす日々の中、5月末には歯学部運動会が開催され良い息抜きになりました。玉入れや大縄跳び、学年対抗リレーなどの競技があり、ムカデ競争ではヒモが切れるというアクシデントもありましたが、楽しむことができました。私の学年は総合2位で終わってしまいましたが、学年で一致団結して臨むことができ、とても良い思い出になったと思います。

振り返ると、少しずつではありますが知識や技術に対する理解が深まってきたと感じます。今後も日々の学びを大切にしながら、歯科医師としての基盤をしっかり築いていきたいです。



欠損補綴学実習で製作中の全部床義歯

歯学科4年生になって思うこと

歯学科4年 小林 丈 晃

歯学科4年生になって、早くも前期が終わろうとしています。ちょうど1年ほど前、3年生の前期までは、解剖学や生理学、生化学、組織学などの基礎系の科目が中心でしたが、3年生の後期からは歯の形態学や保存修復学、歯冠修復学など臨床系の科目や実習が増え、一気に歯学部らしい内容になりました。基礎系科目は試験が厳しく、膨大な範囲を理解・暗記する必要がありましたが、いざ臨床系の科目が始まると、これまで学んできたことが着実に土台の知識として活かしていることを実感しています。また、実習は支台歯形成や印象採得など、臨床に直結する内容であり、ついに本格的に「歯科医師としての訓練が始まったな」と感じました。

現在は、全部床義歯の実習が終盤に差し掛かっています。研究用模型、個人トレーの製作から始まり、咬合採得、人工歯排列、歯肉形成、重合、研磨に至るまで、ひとつひとつの工程に精度が求められ、少しずつのずれが積もり積もって後々に大きな皺寄せとなることを実感しました。思うように作業が進まず、何度もやり直すことになったり、指導を受けては自分の至らなさを痛感したりと、理想と現実のギャップに戸惑うことも多くありました。それでも、もし次に同じことを行う機会があれば、今よりもきっとスムーズに、より良いものをつくれるという手応えも得られましたし、実習を通じて義歯に対する理解が深まった実

感もあったので、第一歩としては、感触はとてもポジティブです。

4年生の後期からは、さらに多くの実習科目が始まります。今以上に時間的にも精神的にも余裕がなくなることは容易に想像できますが、その分、貴重な時期になると考えています。

実習を通じて歯科医師という職業を意識する機会が増え、将来について考えることも少しずつ増えてきました。私は2年次から編入し、それ以前はしばらく企業で開発職に就いていました。職場には、今でも尊敬してやまない、いわば師匠のような先輩がいて、その後ろ姿を追いながら多くのことを学ばせていただきました。組織では、さまざまな立場から異なる利害や思惑が交錯し、その結果導かれる決定は、しばしば「お客様のため」というよりも、「組織にとって楽で都合のよい選択」に偏ってしまうことがあるように感じていました。そのような状況の中で、私とその大きな流れに流されそうになるたび、先輩は「最終的に大切なのは、自分がどうしたいか、そしてお客様がどう感じるかだ」と言い、たとえ困難な道であっても信念をもってあえて選び、誰よりも強く、そしてその強さゆえに誰よりも優しく、私を支えてくれました。

歯科医師としての将来像はまだはっきりとは描けていませんが、先輩から学んだ仕事に対する姿勢は、私の中でひとつのぶれない軸として残っています。これからも、実習と座学の両面に真摯に向き合いながら、将来、患者さんに安心と信頼を届けられる、誠実で力のある歯科医師を目指していきます。

歯学部生の今

歯学科5年 棚 邊 夏 美

今年の4月、初めて着る緑衣に新鮮さと少しの不安を抱きながら、歯学部生5年目がスタートしました。

5年生では、全身管理学、総合模型実習、ポリクリなど、「臨床」や「患者さん」を強く意識させられる講義や実習が主になります。麻酔計画や論文についてグループで調査・検討して発表するものや、症例に応じた治療計画を自分自身で1から考えるような実習もあり、これまで学んできた知識や手技手法を広く活用することが求められるようになりました。特に、麻酔や治療の計画を立てる際には、歯科治療に際して考慮すべき事項の多さを実感し、難しさややりがいを感じました。講義や実習を進める中では、知識の定着が不十分だと感じられることも多々ありますが、よい復習の機会だと考えて知識の定着に努めています。

また、ポリクリの実習は、私にとって患者さんの存在を特に強く意識するきっかけになりました。ポリクリでは、同級生とお互いに口腔内での操作を練習しあうので、患者さんの痛みへの配慮

など、模型実習では疎かになりがちであった部分も確認することができます。私の班の最初の相互実習はフッ化物塗布でしたが、患者役の学生の口の中に歯ブラシを入れるだけでも少し緊張しました。その後の浸潤麻酔の相互実習でも、他人に針を刺すという経験は初めてだったこともあって、かなり緊張したことを覚えています。実際の口腔内での操作は初めてのことばかりなので、今はうまくできないこともあります。「一緒に練習して上手にできるようになろう」という気持ちでお互いに実習をしています。実際の患者さんに対しても自信を持って安全に治療ができるよう、一回一回の実習内容と感覚を忘れないようにして、今後も真摯に実習していきたいと思います。

私たちは今、7月末のCBT・OSCEに向けた学習に力を入れています。個人としては、知識の面でも技術の面でもまだまだ至らないと感じることも多く、不安もありますが、クラスの仲間と互いに確認や相談をしながら頑張っています。CBT・OSCEを乗り越えると、10月からは臨床実習が始まります。各種試験をクリアするに足る知識と技術はもちろんですが、臨床の場で必要とされるコミュニケーション能力などの技能も日々の学習で培っていきたくと思っています。



ポリクリ E・F班のメンバーと。(著者は前列一番右)

歯学部生の今

歯学科5年 柏瀬莉緒

この度は、歯学部ニュースに執筆の機会をいただき、ありがとうございます。私は現在、歯学科の5年生として日々研鑽を重ねています。この文章では、5年生になってからの生活や学びについて少しご紹介させていただきたいと思います。

5年生の今、春には「あと3ヶ月だ」と言っていたCBTとOSCEが目前に迫り、時の流れの速さに焦りを感じつつ、とにかく知識を頭にいれる日々です。後期から始まる臨床実習に向けた実習にも取り組んでおり、毎実習新たな経験を積むことができ、とても良い刺激を受けています。

5年生に進級して最も大きく変化したと感じているのは、実習の内容です。これまでは模型を使い、基本的な手技を一人で繰り返し練習することが中心でした。しかし今は、実際の臨床を意識した、“考える実習”が増えました。なかでも印象的な実習が2つあります。

ひとつは「総合模型実習」です。これは、う蝕、歯周病、歯髄疾患、歯の欠損など、複数の疾患が含まれる一つの模型を用いて、自ら治療計画を立てて処置を進めていくというものです。クラスメート一人ひとりが異なる診断・方針を持っており、同じ模型を使っているにもかかわらず、毎回隣の人と違うことをしているのが、はじめは新鮮な感覚でし

た。また、実習を進めながら「抜歯は先にやるべきだった」など、個々の治療計画で未熟な点がどんどん見つかри、毎回刺激を受けながら実習を進めています。今までの「正解」が明確な実習とは異なり、診断から技術選択まで自分で考え、責任をもって進めることの難しさと面白さを感じています。

もうひとつは「予備臨床実習（ポリクリ）」です。これは後期から始まる臨床実習に備えて、各診療科での基本的な手技や治療の流れなどについて学び、実際に人に対して処置を行う練習をするという実習です。いくつかの班に分かれ各診療科をローテーション形式で回るのですが、初回到口腔外科を回ることになり、「相互で採血を行う」と知った時は、驚きと緊張で前日寝られませんでした。実際に体験してみると、座学では得られない緊張感と達成感があり、「これから自分たちは“人に触れる”医療者になるんだ」と気が引き締まりました。

5年生は、知識と技術の双方の向上が問われる、非常に密度の高い一年です。未熟であることを度々思い知らされ、焦りや不安を感じることもありますが、将来患者さんの前に立つ自分を想像しながら、一つ一つの経験を大切に過ごしています。

今後も一人前の歯科医師を目指し、仲間とともに努力を続けてまいりたいと思います。



臨床予備実習 班員のみならず（著者は下段右側）

歯学部生の今

歯学科6年 上野朋佳

右も左もわからないような状態から始まった臨床実習も、残すところ約2か月となりました。この度は歯学部ニュース執筆という貴重な機会をいただきましたので、間もなく始まる人生最後の夏休みを前に、これまでの臨床実習を振り返りたいと思います。

5年生の10月に行われた登院式を境に、実際に患者さんを診療させて頂く診療参加型臨床実習が始まりました。患者さんと実際に対面する前は、自分の中で「診療が怖い」という感情が一番大きかったことを覚えています。患者さんを相手にして口腔内に器具を入れるという行為自体に、恐怖を感じていました。しかし、引継ぎ診療にて少しずつ患者さんの歯周・義歯メンテナンスを行わせていただくにつれて、診療への恐怖は少なくなっていきました。

引継ぎ診療が終了し、11月になりクラウンブリッジや義歯の診療が始まりました。5年生の前半までに講義や実習で学んだことに加え、患者さんの口腔内の状況を考えながら治療計画やレポートの作成を行い、それに基づいて先生方とディスカッションを行うことで診療前にしっかりと準備

を行うことができました。診療では、先生方に助けていただきながら、術者として、そして良い術者になるためには良いアシスタントになり先を見越した行動を術者の邪魔にならず届きやすい位置で行うことが重要であることも学びました。

それからは、診療や見学、係、放課後のプレチェック、ポストチェック、形成練習と忙しい日々を送り、気が付けば6年生になっていました。臨床実習も折り返し地点を過ぎ自分ができる範囲・できない範囲の把握や、患者さんの問診と口腔内の所見を整理するということが重要であると感じると同時にそれらの難しさを感じています。

臨床実習も残り2か月となりました。これまでの臨床実習を振り返り、協力して下さる患者さん、お忙しい中プレチェック・ポストチェックを行って下さり、診療時も指導して下さるライターの先生方に感謝の気持ちを忘れずに、またその中で学んだことをもとに自分の知識・技術の向上に努めていきたいと思います。

臨床実習の先には、歯科医師国家試験が待ち構えています。歯科医師への第一歩として、まずは国試に合格しその先の学びを進めることがお世話になっている方々への恩返しの一つになると思います。そのためにも一日一日を大切に、成長していけるように努力していきたいです。



技工室で56期のみんなと（筆者は後列左から2番目）

長いようで短い臨床実習

歯学科6年 桐生 真依子

「歯学部生の今」というテーマのもと、今回、歯学部ニュースを執筆することになり、なにを書こうかと思いつきながら、今パソコンの前にはいます。卒業までに1度は書いてみたいと密かに思っていたため、このような機会をいただき、光栄です。

拙い文章となるかもしれませんが、読んでいただけますと嬉しいです。

さて、私たち6年生は現在、臨床実習の真っ只中です。臨床実習を修了するには、最低限の診療達成数を外来の患者さんで治療・見学をさせていただき、「ミニマムリクワイアメント」と、各科診療項目に付けられた規定点数の換算で「400点」を取得することが必須条件となります。診療を行うためには、事前レポートや先生とのディスカッション、技工物の製作、ポートフォリオ作成を行う必要があり、事前準備等のために多くの時間と労力をかけることとなります。このような準備の上で、患者さんの治療を行い、帰られる際に、「ありがとう、きれいになって良かった。」と一言声をかけていただくだけで、これまで割いた時間や努力が実を結んだような気持ちになり、毎回温かい気持ちになります。

一方で、私たち6年生は、外来実習以外のほとんどの時間は、学生技工室という部屋にいます。各々、勉強・技工物製作・他愛もない話で盛り上がり…と自由に過ごしており、もう一つの家のような場所です。今は、マッチング試験の時期で、研修先や将来について話している子が多く、毎日とても刺激になります。

私は、他の大学を卒業し、医療系国家資格取得後、会社員を経て、2年次編入にて歯学部に入学しています。これまでの5年間、大変だったこともありましたが、なんとか乗り越えてこられたのも、急に2年生から入った歳の離れた私を迎え入れてくれ、やるときはやるというメリハリの利いた56期の同期たちのお陰であると、5年経った今、しみじみと感じています。10月には後輩に実習引継ぎとなります。まだ2か月ほど残されていますが、振り返るとあっという間の臨床実習でした。

残りの実習と、集大成である国家試験に全力で取り組み、後悔のない「最後の大学生生活」を送りたいと思います。

無事に歯科医師になれた暁には、実習に協力してくださった患者さんや、ご指導いただいた先生方、同期たちに恩返しができるような、奉仕の心を持った歯科医師になりたいです。



愉快的仲間たちと夕方の学生技工室にて。筆者、前列向かって左。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科2年 山口 栞

歯学部に入學してから1年以上が経ち、現在は2年生として旭町キャンパスで新たな学生生活を送っています。講義の内容も専門性が増し、学びの環境も大きく変わったことで、日々緊張感を持って取り組んでいます。講義や実習を重ねていくうちに、「自分は口腔生命福祉学科の一員である」という自覚が、次第に心の中に根付き始めました。

2年生からは、歯学部の特徴でもあるPBLの授業が始まりました。与えられた課題に対し、自分たちで考え、調べ、グループの仲間と意見を出し合いながら問題の本質を捉えていくこの学習方法は、それまで経験してきた一方向的な授業とは大きく異なり、能動的な学びが求められるため、初めは戸惑いや不安もありました。しかし、私たちのグループは、互いの意見を尊重し合い、補い合う雰囲気や自然と築くことができ、毎回のディスカッションから多くの学びや気づきを得ています。PBLでは、知識の習得に加えて、チームで協力して問題に向き合う力や、自分とは異なる価値観を理解しようとする姿勢も養われていると感じています。これは、今後現場で多職種と連携する際にも、きっと大きな力になると思います。グループの仲間たちとの協働を通して学ぶことができたこの時間は、私にとってとても貴重な経験となりました。

また、「歯科衛生士概論」の講義では、現場での実務経験が豊富な歯科衛生士や社会福祉士の先

生方から、歯科衛生士の仕事の実際や、その職域の広がりについて詳しくお話を伺うことができました。私は大学入試の時点で、自分なりに卒業後の進路についてある程度考えていたつもりでしたが、講義を通じてその考えが大きく広がりました。歯科衛生士は口腔の健康を支えるだけでなく、介護や福祉、地域包括ケア、教育現場など、多様な分野で求められている存在であることを知り、「こういう場で役に立ちたい」「こんな人の力になりたい」といった思いがどんどん湧き上がってきました。一方で、可能性が広がるにつれて、自分がどの道に進むべきか迷う気持ちも強くなりました。それでも、自分の中から自然と湧き上がるやりたいことやなりたい姿があるということは、この学科を選んだ意味があったのだと、あらためて感じることができました。

最近では、歯科衛生士・社会福祉士としての専門技術だけでなく、人と向き合う姿勢の大切さを考えるようになりました。患者さんの不安や生活背景に目を向け、信頼関係を築くことも、この職業にとって重要な役割の一つだと思います。そのためにも、知識や技術に加え、相手の立場に寄り添う気持ちや思いやりの心を持つことを、これからの学びの中で大切にしていきたいと考えています。

今後も、日々の学びや実習の中で新しい発見や悩みに直面することはあると思いますが、一つ一つと丁寧に向き合いながら、自分の可能性を広げていきたいです。そして将来、自信を持って進路を選び、人の役に立てる歯科衛生士・社会福祉士として成長していけるよう、これからも努力を重ねてまいります。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 橋本 凜

三年生に進級してから、あっという間に三ヶ月が経ちました。この三ヶ月間を振り返ると、多くの学びや気づきがあり、充実した日々を過ごしていたことを実感します。特に四月から六月にかけては、約二ヶ月間にわたり、幼稚園での歯科保健指導実習の準備と発表に取り組みました。

未満児から六歳までと、成長や発達の段階に個人差が大きい幼児たちとの関わりは、私にとって非常に貴重な経験となりました。実習では、クラス全員で劇の発表を行いました。子どもたちを楽しんでもらうためには、理解しやすい内容であることと、最後まで飽きずに観てもらえる工夫が必要でした。場面転換のわかりやすさや声の大きさ、表情などの細かな点にも気を配りながら、何度も話し合いを重ねて劇を作り上げました。クラスの皆と協力してやり遂げることができ、大きな達成感につながりました。

また、学年別に行った発表では、「その歳に起こりうる口腔内の変化」をテーマに掲げました。私は年長クラスの担当であったため、段ボールとペットボトルを用いて萌出途中の第一大臼歯を再現した顎模型を作成し、さらにクイズを用意するなど、子どもたちが楽しみながら学べるように工夫しました。実際に自分達の手で顎模型を作る作業は大変でしたが、子どもたちが楽しそうに顎模型で遊んでいる姿を見たときは、非常に嬉しくな

りました。これらの経験は、今後の保健指導の現場でも活かされると思いました。

三年生になってからの大きな変化は、「福祉」の学びが始まったことです。これまでは歯科分野を中心に学んできましたが、現在は福祉と歯科の学習が半々の割合で進められています。福祉分野では主にPBLを通して学んでいます。PBLでは一つのシナリオから事実を抽出し、課題を挙げ、仮説を立て、各々が情報を調べて討論します。自分たちで答えを導き出していく学習方法は、初めは戸惑うこともありましたが、今では他の人の意見にも触れることで視野が広がり、自分の考えを深める貴重な機会だと感じています。

夏休み明けのテストを終えると、医歯学総合病院での臨床実習が始まります。これまで授業や校内実習で身につけてきた知識や技術を、実際の医療現場でどのように活かすことができるのかを自分自身の目で確かめ、経験できることが今から非常に楽しみな反面、緊張します。また、現場ならではの工夫や配慮、チームでの連携の大切さなど、教科書だけでは学べない現場の空気を体感することも、今後の成長に大きくつながると思います。そして、限られた時間の中で正確に処置を行う技術だけでなく、患者さんの気持ちに寄り添う姿勢や、安心感を与える声かけ、表情などもよく観察し、理解を深めたいと思っています。病院実習で得た知識や経験を今後の学びに還元し、常に向上心をもって学び続けたいと思います。そして歯科衛生士として必要な技術や能力、心遣いを少しずつ確実に積み重ねていきたいです。

歯学部生の今

口腔生命福祉学科4年 亀井恵莉

4年生になって早くも4カ月が経とうとしています。私たちは月曜日～木曜日に大学病院で歯科衛生士臨床実習をさせていただいています。早く、どうか平穏に木曜日まで終わってほしいと思う月曜日、学んだこととできなかったことを数える金曜日、そんな1週間を繰り返すうちに着々と特論の提出期限や国家試験、そして卒業が近づいていることに気付き、少し焦りを感じながら過ごしています。

臨床実習では、診療が行われている現場で、実際に患者さんへの治療のアシストやクリーニング、歯科保健指導をさせていただいています。貴重なことであり、責任感を感じています。実習前にはこれまで学んだことを復習し、イメージトレーニングをしてから実習に臨み、教室に戻ってから教科書などを用いて処置の流れや器具・薬品について復習しています。反省点については同じミスを繰り返さないように知識・技術・心構えを確認し、次の日に臨みます。この積み重ねにより、まだ満足いくアシストはできていないものの、色々なことに気付いてスムーズに動けるようになってきました。また私自身、始めの頃は焦りや不安により起きた失敗も多くありました。自分の未熟さを感じ落ち込むこともありますが、先生方や衛生士さんが励ましてくださり、友人にも聞いてもらい、失敗を恐れずに前を向くことができ

ています。いつもご指導いただき、励ましていただき、本当にありがとうございます。先生方のスムーズな診療を支え、患者さんに寄り添い健康を支えることができる歯科衛生士になれるよう、今後も多くのことを学び、考察し、励まし合いながら皆で成長していきたいと思います。

また、それぞれが選んだ実習場所で1カ月間、社会福祉現場実習をさせていただいています。福祉の現場を経験できる貴重な機会です。3年生の2月にも2週間の実習をさせていただきました。私は特養併設型のショートステイで生活相談員さんのお仕事を間近で見学させていただき利用者さんと実際に関わらせていただく中で、「その人らしさ」を尊重して支援することの大切さや、生活相談員を始めとした職員の皆さんの思いなど、座学では学ぶことができない多くのことを学びました。10月には、就労支援B型事業所で実習をさせていただく予定です。障がいをもつ利用者さんの「できること」に着目した支援について、お仕事を視学し、利用者さんと関わり、さらに多くのことを学び経験したいと考えています。

4年生になって臨床実習が私たちのメインとなり、毎日濃い経験をさせていただいています。思い描いていた大学生活とは違い不安なことや大変なこともたくさんありました。乗り越えられているのは一緒に笑い励ましてくれる仲間たちのおかげです。口腔生命福祉学科19期の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。これからも夢に向かって切磋琢磨していきたいと思います。

歯学部運動会を終えて

歯学科5年 山本 采奈

今年の歯学部運動会を終えて、今は安堵と達成感でいっぱいです。私は今年度、運動会委員長という大役を務めさせていただきました。準備期間中はわからないことも多く不安もありましたが、5年生が中心となって各学年をまとめてくれたおかげで、無事に運動会を終えることができました。

運動会の準備は1か月前から始まりました。限られた時間の中で多くのことを並行して進める必要があり、それぞれが講義や実習の合間を縫って動くという、まさに「歯学部らしい」タイトなスケジュールでした。

今までは学年ごとに立て看板を制作していましたが、ベニヤ板の老朽化のため準備段階で廃止を決定し、代わりに旗を制作しました。私が入学する前から続いていた立て看板の制作を私たちの代で廃止してよいのかと迷いもありましたが、同じ学年や担当の先生に確認し、各学年にも意見を求めたところ、特に反対意見はなかったため旗の制作を進めていくことにしました。

当日を迎えるまで天候の心配があり、不安は尽きませんでした。しかし、開会式が始まり、バドミントン部の後輩の出し物に続き、ちいかわたちの選手宣誓が響いた瞬間に「無事運動会を開催でき

てよかった」という思いでいっぱいになりました。

運動会当日は、どのチームも全力で競技に取り組み、応援にも熱が入り、本当に素晴らしい一日でした。運動会委員長として皆さんの真剣な姿や楽しそうな笑顔を見て、心から嬉しくなりました。

また、普段は交流が限られがちな他学年や先生方と一緒に体を動かし、笑い合える場を作ることができたことも、委員長として誇らしく思っています。教室や実習室の中では見られない一面がそこにはあり、人と人とのつながりの温かさを改めて感じました。

今回の運動会を通して、「何かを一緒に作り上げる喜び」「誰かのために動く責任」など、机の上だけでは学べない多くのことを得ることができました。運動会は一日で終わってしまいましたが、その過程で得た経験や仲間との絆は、これから先も残り続けると思います。

最後に、この運動会の開催に協力して下さった先生方、学務の方々、そして学生の皆さんに心より感謝申し上げます。皆さん一人一人の協力と笑顔があったからこそ、今年の運動会も成功裏に終えることができたと思います。なかなかできない体験をさせていただき、ありがとうございました。



5年生集合写真（筆者は前から4列目の右から2番目）

部活動紹介

軽音楽部Liars（ライアーズ）

歯学科2年 中 塚 莉 乃

こんにちは、新潟大学歯学部軽音楽部Liars（ライアーズ）です。私たちは、主に古町の会場で年5回ライブを行っており、本番に向けて主体的に日々練習を重ねています。今年度は10名の新入部員を迎え、音楽を共に楽しむ仲間が年々増えていることに喜びとやりがいを感じています。部員の多くが大学から楽器を始めた初心者ですが、歯学部の厳しいカリキュラムと並行しながら、授業や学業の隙間時間を見つけて練習に励んでいます。

今年度は4月に3回の楽器体験会を開催し、新入生にすべての楽器に触ってもらうことができました。また、練習の仕方や演奏技術などを先輩に相談できる場も設け、自分が演奏する姿をより具体的にイメージできるようになったと思います。Liarsは自主練習が基本で定期的集まる機会がないからこそ、現部員同士の仲も深めるいい機会になったと感じています。ライブでは学年の垣根を超えてバンドを組むことも多く、初心者の部員も先輩に支えられながら安心して演奏に取り組むことができます。また、和気あいあいとした雰囲気

気の中でも互いに刺激しあうことができ、仲間意識や交流が生まれるところがLiarsのいいところだと思います。

6月には古町で新歓ライブを開催しました。新入部員にはまずLiarsの雰囲気を知ってライブの楽しさを実感してもらおうと、今回のライブでは有名な曲を多く取り入れたステージを準備しました。初ライブを迎えた部員や普段とは違う楽器に挑戦した部員、久々にステージに立った部員もあり、新たな挑戦を通して一人ひとりが成長できる機会にもなりました。ライブは成功に終わり、多くの新入部員にも音楽の魅力を感じてもらえたのではないかと思います。先輩たちのステージを見て新入部員の皆さんが積極的にライブに出演し、部活を盛り上げてくれたら嬉しいです。

最後に、日頃よりLiarsの活動をサポートしてくださっている顧問の先生方、OBOGの皆様にも、この場をお借りして感謝申し上げます。今後も変わらぬご指導とご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。



Liars 6月ライブ 筆者は前から3列目、左から2番目

歯学部だからできるボランティア

InDeVO代表 川 添 杏 月

みなさんこんにちは！ InDeVO（インデボ）です。今回は、あまり周知されていないInDeVOの活動について皆さんに少しでも知っていただけたら嬉しいです。

まずは生い立ちから簡単に紹介させていただきます。InDeVOとはInternational Dental Volunteerを省略したサークル名で歯学部の先輩方によって2018年に創部されました。当時は国際歯科保健を中心に活動する目的で作られましたがコロナ禍で活動が妨げられ、現在では地域歯科保健が中心の活動を行っています。

さて生い立ちはこの程度にして、ここからはInDeVOの活動について去年の活動を元に紹介させていただきます。InDeVOは主に地域のイベントに参加しており、西区や古町、新大祭などで屋台のようにブースの一角として幅広く参加しています。学生主体であるため、企画、準備、運営などの全てを自分たちで行っています。イベントで触れ合う方々は主にお子さん連れの家族が多く、子供たちに歯について興味を持って貰えるようなテーマで活動する事が多いです。去年のイベントでは上下顎の歯が一本ずつ抜ける模型を使い、パズル感覚で歯の形や大きさなどを学んで貰うような企画や子供用の歯磨剤にはいろいろな味がある事を利用して味を当てるゲームをして、歯磨きに対する苦手意識をなくせるような企画を行いました。その企画を楽しんだ後に年齢に応じた子供用の歯ブラシやフロスを見せたり、実際に模型で磨く練習をして貰ったりする事で、歯科に興味を持って貰いながら歯が大切なものである事を理解して貰えるような工夫をしました。ゲーム感覚で行う事で子供達が「もう1回！」と何回もやって

くれたり、「なんでこんな形なの？」と疑問に思ってくれたり、自分の歯や歯磨きの仕方、歯医者さんの話をしてくれるようになったりと歯科に対してポジティブな感情を持ってくれるようになり、私たちもやりがいを感じました。保護者の方や学生も簡単にできるので、大人の方もとても興味を持ってくれました。私たち自身も学んだ知識を活用できたり、後輩は先輩に教えて貰ったりと誰もが楽しく学んでいける環境を作る事ができ、メンバー同士でもいい関係が築けました。

今回はInDeVOの魅力の一部しか皆さんにお伝えする事はできませんでしたが、ぜひイベントが近くでやっていたら、私たちのブースに遊びに来ていただいて、魅力を知っていただけたらいいなと思っています！

最後にInDeVOを支えてくださる先輩方や顧問の葭原先生、学務の方々、地域の方々へこの場をお借りして感謝申し上げますと共に今後もよろしくお願いたします。



西区あきまつりの様子
筆者は下段右から2番目

研修医プログラムを修了して

研修医プログラムAを修了して

歯周診断・再建学分野 大学院1年
小泉 瑠果

昨年度まで新潟大学医歯学総合病院歯科医師臨床研修プログラムAで研修を行い、現在新潟大学大学院歯周診断・再建学分野へ進学いたしました、小泉瑠果と申します。歯学部ニュースの執筆のご依頼を受け賜りましたので、僭越ながらご拝読いただけると幸いです。

臨床研修プログラムAでは、研修歯科医は1人の担当医として患者を担当し、1口腔単位での治療を行います。昨年度の臨床研修プログラムAの研修歯科医は10名と少し人数が少なかったため、配当された患者数は約50名であり、その患者の多さに驚きました。最初は戸惑いもありましたが、研修歯科医が少ない・配当患者数が多いならでの経験も多くありました。

まず、配当患者数が多いため、当然診療数が多くなります。そのことにより、齲蝕治療・歯周病

治療・根管治療・補綴治療・抜歯など一般診療を幅広く学ぶことができ、多くの診療数を経て着実にスキルアップすることができました。また、週1回の予診係・急患係を通して、初診患者への問診・口腔内診査をスムーズに行い、急性歯周炎・慢性辺縁性歯周炎の急性発作、冠やブリッジの脱離、義歯破折を主訴に来院された患者への限られた時間での対応について多くの場数を踏むことができました。そして、11月に長崎県にて開催された総合歯科学会では、抄録やポスター製作、ポスター発表、他大学の先生方や研修歯科医との交流など貴重な経験をさせていただくとともに多くの刺激をいただくことができました。

歯科医師臨床研修プログラムでは多くの経験を積むことができ、知識・技術ともに大幅にスキルアップすることができました。このプログラムでの豊富な経験・学びを現在進学している大学院でもしっかりと活かしていきたいと思えます。

最後になりましたが、1年間ご指導いただいた先生方や同期の先生方、病院の職員皆様に対し、感謝申し上げます。

研修医プログラムBを修了して

小児歯科学分野 大学院1年
本 図 渚

この度、執筆の機会をいただきました、小児歯科学分野大学院1年の本図渚と申します。昨年度まで、研修医プログラムBで研修をさせていただきました。私は、4月から9月まで新潟大学歯学総合病院小児歯科・障がい者歯科にて、10月から3月までは、富山県立中央病院歯科口腔外科にて研修させていただきました。

前半の小児歯科・障がい者歯科では、初めて小児の治療を担当させていただきました。患者配当前に、小児歯科の講義と模型実習を受け、小児歯科ならではの治療方法を学習します。また、患者配当後には、診断・治療計画を立てたものをまとめ、指導医の先生方からアドバイスを受け、実際の診療を行います。いざ治療となると、目の前で泣き叫ぶ子供に圧倒される場面もありました。しかし、安心する声のかけ方、保護者の方とのコ

ミュニケーションの仕方など、マンツーマンでご指導いただけただけで、少しずつ落ち着いて対応できるようになりました。泣きながらも頑張り、最後は笑顔で手を振って帰っていく姿は、いつ見ても胸が熱くなります。

後半の富山県立中央病院は、先生方、衛生士さん、技工士さんが非常に温かく、日々笑顔が絶えない環境であったと感じます。私は特に埋伏智歯抜歯を多く経験させていただきました。最初は、慣れない外科処置で戸惑うことも多く、落ち込む日もありました。しかし、指導医の先生の手厚く、的確なご指導の下、着実に成長することができました。他にも、病棟管理や全身麻酔下での執刀などもさせていただきました。また、2jawのオペを初めて見たときは衝撃的でしたが、顎変形症が改善し、患者さんの喜ぶ姿を見たときは、外科処置のもつ大きな力を感じました。

この1年間で得た経験は、今後の糧となる貴重な財産となりました。最後になりますが、ご指導してくださったすべての方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



富山県立中央病院にて（筆者は下段右から2番目）

大学院へ行こう

組織再建口腔外科学分野 大学院2年 小林 雅

組織再建口腔外科学分野の小林雅と申します。今回「大学院へ行こう」をテーマに執筆の機会をいただきましたので、大学院進学について悩んでいる学部生・研修医の皆さんの参考になれば幸いです。

私が大学院進学を決めたのは、臨床研修時です。学部生の頃は口腔外科に興味はあっても実際の診療や手術を経験する機会は多くなく、研修医の期間に挑戦してみようと思い、研修先を口腔外科に絞りました。もし向いていなくても研修期間を耐えてまた進路を考えなおそうと思っていました。しかし実際に研修が始まると、口腔外科臨床の面白さと口腔再建外科の雰囲気惹かれてすぐに入局を決めました。

入局後1年目は、臨床経験を積ませていただきました。入局当時は人手が少なかったこともあ

り、本当にたくさんの症例・処置に関わらせていただきました。様々な疾患を広く経験し、また当科で症例数の多い顎矯正手術などは繰り返し経験させていただくなかで、口腔外科の裾野の広さと奥深さを学び、本当に楽しい一年を過ごしました。

今年度からは、せっかく大学院に入ったからには大学院でなければ経験できないことをやってみたいと思い、生体組織再生工学分野で基礎研究に挑戦しています。

大学院は自分だけでは経験できないことや挑戦できないことを、やってみようと思える環境が整っているように思います。進路に迷う人こそ、まずは大学院進学に挑戦してみるのはいかがでしょうか。



札幌での学会にて（筆者は左から2番目）

大学院へ行こう

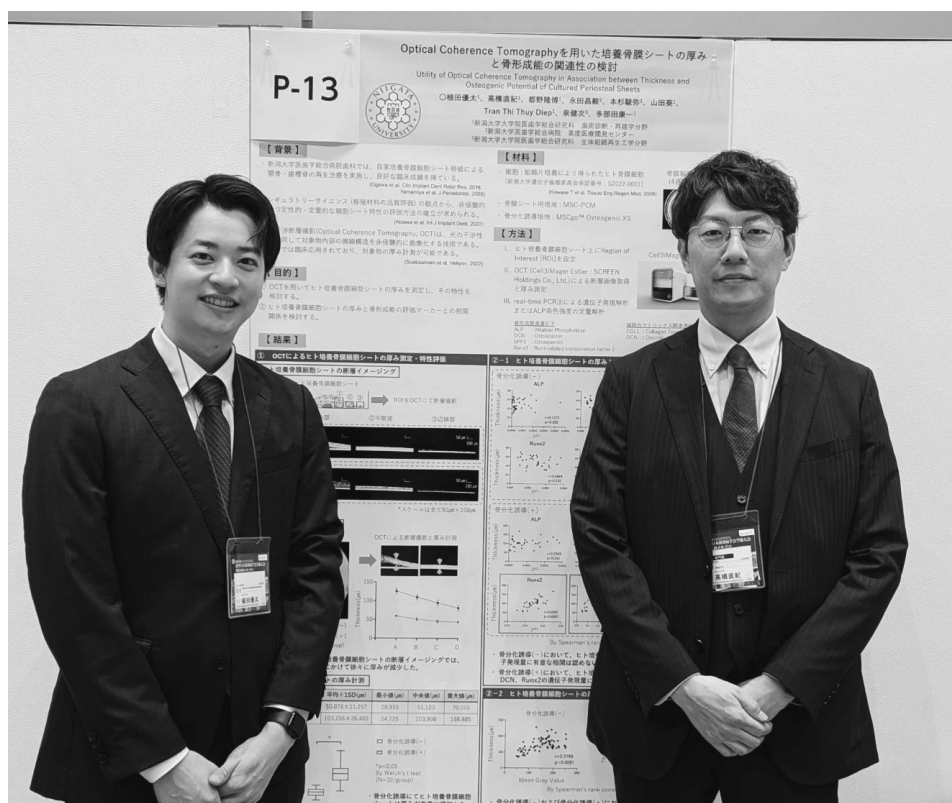
歯周診断・再建学分野 大学院3年 植田 優太

この度、「大学院へ行こう」ということで原稿執筆の機会をいただきましたため、自身の経験を踏まえてご紹介できればと思います。私が大学院に進学するきっかけは、大学6年の臨床実習でした。当時の私は歯科医師になって患者さんを治療するイメージが持てず、このまま社会に出て大丈夫かと将来に不安を感じていました。また、専門的な知識・技術を身に付けたいという思いもあったところに、歯周診断・再建学分野の先生から大学院に興味ないかと誘われたことがきっかけで大学院進学を決意しました。

大学院3年目となった今に思う大学院の魅力とは、多分野の様々な専門性を持った先生や海外留学生など、様々な人と共に治療・研究することにより、幅広い視野やネットワークを持てることで

はないかと思います。多種多様な人と関わることは、論理的思考力や客観的視点、対人コミュニケーションなど歯科医師としてだけでなく、人として成長できる機会が多くあるのではないのでしょうか。私自身も大学院進学により成長できたと感じています。

最後になりますが、大学院は修了までに4年を費やします。4年間を価値・意味あるものにできるかどうかは自らの努力次第ですが、自身が成長するためのヒントや助けが必ずあると思います。また、大学院在学中にも将来についてゆっくり考えることができますし、新たな選択肢が見つかるかもしれません。少しでも興味を持っている方はぜひ勇気を持って大学院に進学してみたいはいかがでしょうか。



日本歯周病学会（札幌）にて（筆者左）

大学院へ行こう

う蝕学分野 大学院4年 齋藤 瑠 郁

縁あって「入学者のことば」に続き、大学院4年になった今「大学院へ行こう」を担当します。

さっそくですが、学生や研修医の皆さん、少しでも迷っているならぜひ大学院へ。その理由は、研究者としても臨床家としても成長できる時間になるからです。

まず研究者について。前提として、私はもともと研究に漠然とした興味があり、今後も研究活動を続けたいと思っています。3年前、初心者にありがちな失敗をしたと書きましたが、今でもそんなことは多く、長いであろう研究人生の最初の4年間で初心者を脱するとは全く思っていません。この原稿と並行して書いた学会抄録は真っ赤に添削されて返ってきていますし…。では何が成長か。「先生に教えてもらおう」から、「先生とディスカッションしよう」になった（近づいた）点を成長と自己評価しています。論文執筆や学会発表も経験が増えてきて、最初よりはマシになったと信じています。研究が面白いかどうかは実際にやってみなければ分かりません。不安もあるでしょう。でも、自分の手で何かを発見するって、カッコ良くないですか？研究に飛び込む理由はそ

のくらいで十分です。

次に臨床家について。大学院生活では臨床の時間が限られるのは確かです。その中でどれだけ挑戦するかが重要です。私は研修医の頃からう蝕学分野でお世話になり、当初は1歯の根管治療を中心に担当しました。大学院進学後は、全顎治療に積極的に挑戦し経験の幅を広げています。ありがたいことに、周囲には経験豊富な先生方がたくさんいて、所属科の専門領域に限らず、補綴治療や外科治療にも挑戦できています。大学院生の立場は面白いもので、学部生からは先生と呼んでもらっていますが、まだ学生です。難しいことを考えず先生方に素直に頼れる最後のチャンスかもしれません。これが意外と魅力的な点と感じています。

正直なところ、大学院に進学してから体力的にも精神的にもハードだと感じることは何度もありました。でも、なんとながなっています。未来を想像すると、今以上に体力がある時期はおそらくもう来ません。大学院進学はたくさんの人・事に出会い、学べる選択です。今だからこそそのかけがえない経験ができます。皆さん、ぜひ大学院へ。一緒に多くのことに挑戦しませんか。



バイオフィルム研究グループの先生方と。筆者位置：後列中央

素顔拝見

顎口腔インプラント治療部

松崎 奈々香

顎口腔インプラント治療部の松崎奈々香と申します。素顔拝見執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介させていただきます。

新潟市西蒲区出身で山と田んぼに囲まれた自然豊かな地に生まれました。夏は川でザリガニを採って教室で育てたり、冬は友人と凍った川の上を散歩して下に落っこちて泥んこになったりしていた田舎の小学生でした。中学ではソフトテニス部に入り日焼けで真っ黒になって朝練から夜練までボールを追いかけて走っていました。

歯科医師である両親の影響もあり新潟大学歯学部48期生として入学しました。バンド音楽が好きでひそかに憧れていた軽音楽部にはなかなか勇気が出ず、友人に付いて行った弓道部とバドミントン部に先輩たちが優しいとの理由で入部しました。良い先輩、同期、後輩に恵まれ楽しい時間を過ごし、卒業した今でも大事な繋がりだなと感じます。4年生以降は国際交流サークルのネクサスに参加し、片言な英語でしたが留学生とお互いの国や大学について話し友人になれたことや、マル

メ・UBC・タマサート大学への短期留学の機会をいただき、そこで目にしたものはすべて新鮮でとても貴重な経験でした。

研修は部活の先輩からゴールドスタンダードを学べるよとの勧めもあり、歯科総合診療部Aコースを選びました。1年を通してライターの先生方に丁寧に指導いただいたことは自分の基礎になっています。その頃、またまた友人に付いて行った顎関節治療部（現顎口腔インプラント治療部）の説明会に参加し、今の私の師匠・メンターである荒井先生や高嶋先生とお会いし、インプラント・顎関節症・補綴と広く学べて面白そうと思い後期研修医として入局しました。ここで教わることはさらに新しいことばかりであっという間に月日が過ぎてもっと学びたい気持ちが大きくなり、同期よりも2年遅れて大学院に入学しました。

当医局ではインプラントと顎関節症を新患担当していますが、少し特殊で口腔外科、補綴科、歯科総合診療部、歯周病科の先生方にも参加していただき新患対応や症例検討会を行っています。様々な専門の先生の意見を交換しながら検討でき日々勉強になります。また、もう入学から10年以上の付き合いになる同期が大学院卒業メンバーは全員残っているので、すぐに会えて診療の相談ができたり、お互いの専門分野の情報交換ができることも良い刺激になっています。

本学に入学し現在に至るまで多くの尊敬する先生方に出会い今の自分があると感じます。まだまだな部分ばかりではありますが少しでも病院や学部へ貢献できるよう日々精進して参ります。学部生と会える機会はなかなかないのですが、新大研修コースを選んだ方は研修医でのインプラント研修でお会いできるのを楽しみにしています。

※



学位授与式

歯科矯正学分野

上 村 藍太郎

私は2006年入学の42期生ですので、出身の群馬から新潟に来て19年が経ちました。歯学部卒業後、研修医を経て大学院生として歯科矯正学分野に入局しました。入局後は「内因性カンナビノイド機構が関わる鎮痛メカニズムの解明」を研究テーマとして、痛みの研究に取り組みました。私たちが痛みを感じる仕組みは複雑で、痛みの増大、抑制に関わる様々な要因が絡み合っています。侵害情報が中枢に達すると痛みを感じますが、その一方で侵害情報は内因性カンナビノイド機構を活性化することで痛みを抑制します。学位研究では、神経障害性疼痛モデルマウスを使用して脳切片の免疫組織染色や行動実験を行い、口腔顔面領域において内因性カンナビノイド機構が関わる疼痛抑制機構について研究を行いました。内因性カンナビノイド機構は痛みを抑制しますが、グリア細胞は痛みの増大に関与します。そこで学位研究の継続テーマとして、「内因性カンナビノイド機構におけるグリア細胞の役割の解明」を目指して実験を行いました。大学院卒業後も研究を継続できたことは大変光栄なことでした。

大学の矯正臨床では、矯正単独治療のほか、顎変形症や部分矯正治療など様々な症例を経験しました。振り返ると、それぞれに難しさがあると感じています。歯が思うように動かない、歯の動きが予想と異なる、患者さんから十分な協力を得られないなどその要因は様々です。症例を重ねる中



2024年に開催された甲北信越矯正歯科学会のシンポジウムにて

で、治療法が一通りではない点が矯正歯科治療の難しさであり、また面白い点であると感じています。昨年行われた甲北信越矯正歯科学会では、スケレタルアンカレッジをテーマとしたシンポジウムでシンポジストを務めました。スケレタルアンカレッジの使用状況を振り返る中で、力学的コントロールの理解がスムーズな治療に不可欠であることを再認識しました。これまでは基本的手技の習得に精一杯でしたが、今後は歯の移動に関わるメカニクスの理解を深め、無駄のない効率的な治療を目指したいと考えています。

私の同期の多くは開業し、会う機会もめっきり減りましたが、たまに顔を合わせると学生時代の昔話で盛り上がります。私の学生時代は、西堀のロッチで焼肉を食べてからカラオケに行き、明け方に味濱家でラーメンを食べるのが定番でした。開業医になった彼らと話すとは新しいものに手を出したがるタイプだと痛感します。時代の流れに取り残されないように、しかしながら大学で学んだ基本を大切にして、日々の臨床に取り組みたいと思います。



生体歯科補綴学分野

小 野 喜 樹

2025年4月1日付で生体歯科補綴学分野の助教を拝命いたしました、小野喜樹（おの よしき）と申します。このたび、「素顔拝見」の執筆の機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は長野県箕輪町です。箕輪町は四方を山に囲まれた、非常にのどかな町です。子どもの頃は、川遊びやカブトムシ採集など、自然の中で遊ぶことが日常でした。高校は地元の伊那北高校に進学し、柔道部に所属していましたが、臆病な性格で人を投げることができず、引退まで他の部員に投げられ続けるサンドバック役に徹し、常に体はアザだらけでした。

2012年に新潟大学歯学部にて48期生として入学しました。48期は現在でも15名もの先生方が新潟大学に在籍しており、いまでも毎年みんなで温泉旅

行に行くほど仲が良いです。私は、6年間硬式庭球部に所属し、テニス漬けの日々を送りました。中でも毎年千葉県白子町で開催されるオールデンタルでは、真っ黒になるまで日焼けしながら、仲間とともに勝利（とその後の勝ち酒）を目指して全力を尽くした日々が今でも最高の思い出です。

卒業後は、「うちに入れば死ぬほど臨床やらせてやるぞ」という魚島勝美教授の熱いお言葉に心を打たれ、生体歯科補綴学分野の大学院に進学しました。実際の大学院生活では、臨床・研究・教育すべてに積極的に取り組む必要があり、大変に感じることも多くありましたが、それ以上に充実した濃密な4年間を過ごすことが出来ました。特に、指導医である加来賢先生の御指導のおかげで、臨床や基礎研究に楽しさを見いだせたことが、大きなモチベーションにつながりました。私は歯根膜再生に関わる研究に携わっておりますが、特に嬉しかったのは、自身の学位論文が『Journal of Dental Research』に掲載され、同誌の表紙にも採用されたことです（2025年2月号）。大学院時代、質の高い組織標本作製に多くの時間を費やして苦労したこともあり、組織標本の質の高さについても認めていただけたことに大きな達成感を感じました。今後も最終目標である

「歯根膜再生」の実現に向けて、研鑽を積んでまいりたいと思います。

私の趣味は「アルビレックス新潟」です。週末には、ホーム・アウェイ問わずスタジアムに足を運び、チームと共に戦っております。現在、アルビレックス新潟はJ1最下位（2025年7月現在）という苦しいシーズンを送っておりますが、必ずや残留を成し遂げると信じ、私も全力で後押しをしたいと思います。

最後になりますが、まだまだ未熟者ではありますが、生体歯科補綴学分野のみならず、新潟大学歯学部発展に貢献できるよう、精進してまいります。今後とも御指導・御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



IADR2025（バルセロナ）にて（筆者が一番左）

Where Cherish Blooms : A Memoir from Mandalay to Niigata

Division of Reconstructive Surgery for Oral and Maxillofacial Region
Myo Maung Maung

I am Myo Maung Maung, a PhD student from Myanmar currently enrolled in the Division of Reconstructive Surgery for Oral and Maxillofacial Region, Faculty of Dentistry, at Niigata University. My academic journey in dentistry began at the University of Dental Medicine, Mandalay, and brought me to Niigata, where I have been pursuing advanced studies with a focus on surgical orthodontic treatments.

Due to the pandemic period, there was an unexpected pause in my journey, making a delay on my arrival in Japan. Upon finally reaching, I initially expected that adapting to a new culture and environment would be challenging. However, thanks to the kindness and encouragement of my professor and teachers, I quickly found comfort and confidence in my new surroundings.

Over the past four years, Niigata University has become more than just a place of study - it has become a place of growth, discovery, and inspiration. The academic guidance and personal support I've received here have had a profound impact on my development. I'm especially grateful to be part of a department where mentorship and collaboration are highly valued.

Beyond academics, life in Niigata has been equally enriching. The city's calm and

uncrowded atmosphere, combined with its beautiful four-season scenery - from peaceful, snow-covered winters to vibrant springs and colorful autumns - has provided an ideal environment for focused study and personal reflection.

I am profoundly grateful to my teachers and friends of Niigata University for such a transformative and cherished experience ; thank you for everything.

My heartfelt thanks go to my teachers, colleagues, and friends for making this chapter of my life so memorable.



At Universal Studio Osaka, Japan

Japan : A trip that transformed my life

Division of Preventive Dentistry
Olenka Yomira VALENZUELA TORRES

Welcome to Niigata!

Being here marks an important step in your life and I sincerely want to congratulate you on all the effort and dedication you've put into making it this far.

My name is Olenka and I am from Peru — a beautiful country located on the other side of the world in South America. Peru is known for its incredible biodiversity, ancient cultural heritage, and world-renowned cuisine. If you ever get the chance, I encourage you to visit!

Japan was the first foreign country I ever visited, and now it's the place I call home. When I arrived, everything was completely new to me — the culture, the language, the customs — but it was also incredibly exciting. I discovered that each season in Ja-

pan brings unique experiences, and there's always something new to enjoy. It's a country full of surprises waiting to be discovered.

My life as a graduate student in Niigata has been both unique and transformative. I'm very grateful for this opportunity. I've learned so much and grown not only as a professional but also as a person. Like many of you, I was scared at first. I worried about whether I could adapt to this new lifestyle and whether my knowledge would be enough to face academic challenges. I knew I would miss my country and my family. I had to learn to manage my time, adapt to a new educational system, and find my own rhythm. Luckily, I met people who supported me along the way. My professor and



Friends from around the world in Niigata.
I'm the fifth person from the right in the bottom row.

supervisors have guided me from the start and continue to do so. Their suggestions and feedback have helped me see new perspectives, improve my projects, and grow.

This experience has allowed me to connect with people from all over the world. I've had the chance to travel both within and outside Japan to present my research — in cities like Tokyo and even in countries like Thailand. I never imagined I'd have the chance to share my work with professionals from around the globe.

A major challenge for me was the language barrier, as Spanish is my native language. Thanks to constant practice, I even won first place for best scientific research presentation at a conference — my first presentation during my PhD! However, Japanese has been my biggest language challenge. When I arrived, I couldn't understand or express myself at all. There were times when I felt very discouraged because

I didn't see much progress, and others seemed to learn it so quickly. But through classes, workshops, and a lot of daily practice, I've slowly improved. Now, I can understand basic conversations and express myself better. I'm still learning, but I'm proud of how far I've come.

Living in Japan — especially in Niigata — has opened my eyes to a whole new world. I've grown more than I ever imagined, and I'm deeply thankful for every step of this journey. I'm about to begin my third year, and looking back, I feel emotional seeing all that I've achieved.

To all of you, new international students : I wish you the very best in this new chapter of your lives. Don't be afraid of the unknown — every difficulty is a chance to grow. Give your best, enjoy every moment, and embrace the experience fully.

Welcome!



Workshop on Clinical Research Methods- Khon Kaen, Thailand.
I'm the first person from the left in the bottom row.

新潟大学歯学部委員会について

令和7年度の新潟大学歯学部執行部体制（総務委員会）が以下の通りになりました。

学部長・歯学科長

井上 誠

歯科総括副病院長

多部田康一

副学系長（渉外担当）

大内 章嗣

医歯学総合研究科長

大峽 淳

副学部長・評議員（研究担当）

照沼 美穂

副学部長（国際交流担当）

小川 祐司

副学部長（学務担当）

濃野 要

学部長補佐（広報担当）

寺尾 豊

学部長補佐（臨床実習担当）

藤井 規孝

口腔生命福祉学科長

葭原 明弘

オブザーバー

小野 和宏

また今年度新たに、臨床教育DX推進委員会、ダイバーシティ推進委員会を立ち上げ、時代のニーズに対応した学部運営を行っています。

名誉教授称号授与について

2024年3月末をもって本学を退職された前田健康先生に名誉教授の称号が授与されました。

令和7年度科学研究費助成事業採択結果について

令和7年度科学研究費助成事業採択結果が発表されました（2025年4月交付内定時点）。新潟大学全体での応募件数723件（前年比46件減）のうち、新規採択件数は216件（前年比2件増）でしたが、基盤（A）、学術変革（A・B）などの大型種目採択件数は0件（前年比10件減）であったため、配分予定額は3億9千7百万円（前年比1億3千6百万円減）と大幅に減少しました。歯学部における新規採択件数・採択率は22件（前年比1件増）・40%（前年29.0%）、大型研究の新規採択件数・採択率として、基盤（B）が3件（前年比1件減）・27.3%（前年25.0%）、現在の課題保有

率は全体で65.3%（前年64.1%）、病院歯科の新規採択件数・採択率は18件（前年比5件減）・51.4%（前年56.1%）、現在の保有率は61.2%（前年58.6%）でした。このうち若手研究の新規採択件数・採択率は歯学部2件（4件減）・28.6%（前年46.2%）、病院歯科13件（3件減）・68.4%（前年61.5%）でした。なお中区分（口腔科学およびその関連分野）別にみた過去5年間の新規採択累計数では、新潟大学歯学部の新規採択件数が260件（第4位）、1課題当たりの配分額4,782,203円（第6位）となっています。

QSランキングについて

2025年3月に分野別QS世界大学ランキングがアップデートされ、歯学分野において、新潟大学歯学部は東京科学大学に次いで、日本で同率第2位、世界第51-120位にランクされました (<https://www.topuniversities.com/subject-rankings>)。QSランキングとは、英国の世界大学評価機関クアクアレリ・シモンズ (QS) が

Academic reputation (研究者による評価)、Employer reputation (雇用主による評価)、Citations per Paper (論文の被引用数評価)、H-index Citations (H-indexに基づく研究評価)、総合評価などをもとに毎年発表している大学ランキングであり、世界で最も広く使われている大学評価指標のひとつです。

学長を招いてのFD講演会開催

2025年5月21日に、牛木辰男新潟大学長、澤村明理事を招き、新潟大学の概要、大学がおかれている現状、学部教育とメジャー・マイナー制や大学院改革と研究力強化などについて、澤村理事からは教員人事に関する課題とスイングバイプログ

ラムについて講演いただきました。さらに、昨年度新潟大学が採択された地域中核・特色ある研究大学強化促進事業 (JPEAKS) についての概要を紹介いただき、歯学部に対する期待が述べられました。



牛木辰男学長



澤村明理事



会場

科研費獲得にかかるFD講演会開催

7月14日から始まる科学研究費助成事業（科研費）の公募を目の前にした2025年7月9日に、URA、加来賢、竹中彰治先生らを講師に招いて、標記講演会を実施しました。新潟大学歯学部がかかげるミッションには、研究活動に必要な資源（ひと・もの・かね）を活用し、学問の継承・発展をはかり、価値ある研究成果を生み出すこと、歯学部の第4期中期目標・中期計画には、若手研究者の科研費採択率の高い維持が掲げられています。本講演会では、初めにURAから本年度の科研費申請にかかる変更点やURAの紹介があった後に、加来賢先生、竹中彰治先生らが、科研費申請書の記載についてのノウハウ、注意点についてTips提供という形で講演されました。いずれも参加者からは大好評でした。



会場



加来先生

新潟大学歯学部オープンキャンパス2025

新潟大学歯学部オープンキャンパスが、8月7日（木）、8日（金）の両日開催されることとなりました。今年是对面型（事前申し込み必要）の

みの実施を予定しており、両日ともに午前、午後の2回のイベントとなります。

教授に就任して

教授就任のご挨拶

新潟大学大学院医歯学総合研究科
歯科矯正学分野 丹原 惇

歯学部ニュースをご覧の皆様、こんにちは。去る2024年11月1日より歯科矯正学分野の教授を拝命いたしました丹原 惇と申します。当分野は、1968年4月に新潟大学歯学部歯科矯正学講座として創設され、初代 福原達郎 教授（1968年～1977年）、二代目 花田晃治 教授（1977年～2004年）、三代目 齋藤 功 教授（2004年～2024年）の3名の先生が主宰されてこられました。50年以上の歴史を有する教室であり、同門会員の先生も200名を超えております。この伝統ある歯科矯正学分野の歴史を紡いでいく重責を担うこととなり、改めて身が引き締まる思いです。

2001年に入学してから、学部学生、研修医、大学院生、教員と留学期間を除けば本学歯学部一筋でキャリアを積みさせていただき早24年が経ちました。実は2001年の歯学部ニュースには私が入学した当時の「入学者のことば」が掲載（<https://www.dent.niigata-u.ac.jp/ShigakubuNews/95/10-13.pdf>）されており、初心にかえる意味も込めて改めて読んでみました。そこには、「なぜか、私の周りがすべて新潟大学へ進学させるようにはたりました。」と書かれておりました。まさかその時の私は25年後にこのような未来が待っているとは微塵も想像できていませんでしたが、今思い返して考えてみると、やはり何か強い縁というものを感じていたのだと思います。私自身、キャリアを積んでいる中で、「新潟大学の歯学部の一員として」という意識はずっとありましたので、それも今の私に続いている大切な要素のひとつです。

これまでのキャリアを踏まえて、今後は分野の

長として、また歯学部の舵取りをする一員としての仕事が始まることとなりますが、歯学部を取り巻く環境は厳しさを増す一方です。特に、大学院進学者の減少は歯学部の将来を考えると憂慮すべき事態だと思います。こういった状況の中での分野の運営にあたっては、教育面では学部学生に対して、歯科矯正学の面白さ、奥深さに触れることができるような講義実習を設計しながら、歯科医師となった後もさらに専門的なスキルとしての矯正歯科臨床を習得できる体制の充実化を図って参りたいと思います。魅力ある研究も人財の確保には重要ですので、臨床系分野として診療に直結する臨床研究の他、基礎系分野と連携した共同研究により新たな知の創出を通して社会貢献に繋がりたいと考えております。

私の着任により、2025年現在、日本で最も若い歯科矯正学の医局となりました。医局員も皆、新しい船出と共に各自の役割を認識してくれて、一致団結して日々の業務にあたっております。この若さには時には経験不足にも捉えられることもあるかもしれませんが、我々は与えられた時間の長さをチャンスと捉えて、長期的な視点をもって種々の問題に挑戦していこうと考えております。最後になりましたが、今後も変わらぬご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



就任祝賀会にて医局員と共に
(前列左から3番目が筆者)

退職によせて

「何故？」

歯科麻酔学分野 教授 瀬尾 憲 司

本来、来年春に定年退職となるところ、本年5月末日をもって新潟大学の教授を早期に辞し、新潟を離れて新たな生活を始めました。現在、沖縄県内の病院で「いち歯科麻酔医」として働いております。多くの方からなぜ大学を辞めたのかという質問をいただきましたので、これに答えます。

定年退職という職務上満期を務め上げることは非常に大切なことです。しかし、今まで関与してきた学内または院内での各種の役割を永続することはできません。どこかで区切りをつけることが必要です。私は今までに日本歯科麻酔学会総会を主催でき、また教育用ビデオ「再現、歯科診療中の緊急事態とその対応」を作成し、さらに多くの国内外の研究者との交流ができた達成感がありました。残りの時間に何ができるかと考えると不安

でしたが、医局スタッフの臨床・研究技術の向上により次世代が活躍できると考えたことが、早期退職へ私の背中を押したのです。

では、なぜ沖縄か？これもよく聞かれることですが、因みに私の家系や今までの活動の経緯から、沖縄との直接の繋がりはありません。したがって、退職後の生活をする地の選択肢としては one of them でした。縁あって沖縄県内の歯科医療状況を知る機会があり、同地域での歯科医療の発展に麻酔の必要性がkeyとなっていることを知り、指導できる歯科麻酔医を望むスタッフの熱心な依頼に共感したことが最大の理由でしょうか。沖縄は旅行で2回来た程度であり、決して良く知っている地ではありません。では学会や出張などで数限りなく足を運んできた東京には詳しいかということ決してそうではありません。すなわち何度も訪れていることが移動を安心させる理由にはなりません。また1年のうち数か月は雨・雪の舞い散る新潟と、街路わきにバナナの木



1) 通勤路の脇に立つバナナの木

が並ぶ沖縄¹⁾の気候の違いは、温かい地域をよく知らない人間にとっては魅力的です。隣の県に移動しても、引っ越しは引っ越しですし、空路の利用でさほど遠くに感じないこと、さらに魅力的な多くの観光地に囲まれて暮らせることなどにより、退職後に生活する場としての候補地になったのです。

さて、沖縄県には3つの主たる県立病院から構成され、私が所属する病院は那覇市隣の「南部医療センター・こども医療センター」です²⁾。新潟大学医歯学総合病院と比べるとやや小規模ですが、小児の様々な外科的治療に特徴があるようです。話を歯科に向けると、沖縄県内ではこの3つの病院に加えて離島にも関連する県立病院があり

ます。それぞれに歯科口腔外科があり、結構な数の全身麻酔を必要とした症例数があります。特徴的なのはこれらの病院がスタッフの移動によって人的資源を有効に利用していることです。それでも麻酔医不足により十分な治療を供給できないというジレンマがあります。そのため現在私の麻酔業務は忙しくなってしまう、退職後は悠々自適で暮らそうとしていた当初の目論見は見事に外れてしまいました。

将来この地で歯科麻酔医を輩出可能な研修システムを構築し、そこから全身管理が可能な診療ができる歯科医師が育つように活動していきたいと考えており、それが私の新たな目標であると考えたのが、この退職を決断した理由です。



2) 病院全景

包括歯科補綴学分野の紹介

包括歯科補綴学分野 教授 堀 一 浩

当分野は、昭和42年に「歯科補綴学第一講座」として発足しました。初代・石岡靖先生（昭和42年4月就任）に始まり、第二代・河野正司先生（平成5年3月就任）、第三代・野村修一先生（平成20年7月就任）、第四代・小野高裕先生（平成26年10月就任）と、歴代教授によって発展が継承されてまいりました。その間、「摂食機能再建学分野」「包括歯科補綴学分野」へと名称を変えながら、研究・教育・臨床の三位一体の活動を進めてきました。そして令和5年12月より、私、堀一浩が第五代教授として着任いたしました。

当分野では、歯科補綴学の中でも特に「有床義歯補綴学」を中心に担当しています。有床義歯は、長い歴史を持つ伝統的な治療技術であり、従来通りの講義による理論の習得に加え、模型実習における排列・重合などの技術習得、さらにPBLや臨床実習を通じて診断力と臨床技術を段階的に育成しています。また、近年ではデジタル技術を活用した義歯設計や排列など、将来的に主流となると考えられる「デジタルデンチャー」の教育にも力を入れております。

臨床面では、補綴治療を中心に、多様な専門外来を展開しています。従来の顎顔面補綴治療をはじめとして、有病高齢者への対応や、医科歯科連携による口腔管理、顎関節外来、インプラント外

来へと領域を拡大しています。

研究活動においては、「機能評価 × 補綴治療」を主軸とし、舌圧・顎運動解析など当教室が独自に開発した評価技術を用いて、生体計測と疫学研究を融合させた実践的な取り組みを進めています。たとえば、スマートフォンで画像解析可能な咀嚼能率測定アプリ、日常の食事に使用できるウェアラブル型咀嚼回数計、舌苔を可視化するスマホアプリなど、先進技術を駆使した評価ツールの開発と社会実装に注力しています。また、工学・栄養学・農学など他分野との学際的連携や企業との共同研究も積極的に展開し、新たな技術と視点の融合を図っています。

現在、大学院生13名を含む計24名の教職員が、臨床・教育・研究に日々真摯に取り組んでいます。若手の先生や海外からの留学生も多く在籍しており、活気と国際性にあふれた環境であることも大きな特徴です。50年を超える歴史と伝統を受け継ぎつつ、分野の枠を超えて新たな技術を取り入れながら、歯科補綴学を通じて国民の口腔健康の向上に貢献してまいります。今後とも、医局員一同、より一層精進してまいりますので、変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



医局員集合写真

生体組織再生工学分野

生体組織再生工学分野 教授 泉 健 次

はじめに

当分野では2025年8月22日、23日に、「新潟大学駅南キャンパスときめいと」において日本歯科理工学会令和7年度中部地方会セミナーを主催いたします。「ミクロンの匠が医療を変える」——日本発、微細加工と医療技術の融合最前線、を企画テーマとして開催の予定です。特別講演は「日本の超微細精密加工技術との医工連携による開発と事業化」という演題名で、長野県諏訪市に本社をおく(株)小松精機工作所 専務取締役研究開発部長、(株)ナノ・グレインズ 代表取締役社長 小松 隆史先生にご講演いただきます。小松様は、私が代表取締役を務めます株式会社CollaWindのサポート企業としても、製品開発、経営の面で大変お世話になっております。CollaWind自体がコラーゲン製材の片面に3次元微細構造を付与した製品です。精密加工技術とアントレプレナーシップについてお話いただけるはずです。すでに参加申し込みは締め切られておりますが、歯学部内でご興味をお持ちの先生方でしたら、まだ受付

可能ですので私までご連絡ください。

私(写真 前列右)が当分野の教授を拝命した際に、講座名を生体材料学分野から生体組織再生工学分野と改称しました。しかし、理工、歯科理工学の方が、圧倒的になじみがよろしいかと存じます。実は、私が本稿を執筆いたしますのはこれで2回目となります。前は11年前の歯学部ニュースの第125号に寄稿しました。今読むと、就任1年後に書いた原稿にはフレッシュ感がありますが、それに負けないように今回もご紹介いたします。

教室の現構成員

分野の教員は私を含め2名です。金谷貢先生(写真 前列左)は1995年8月から助教、2021年6月に講師に昇任され、現在に至ります。また、学外にいる社会人大学院生を含む6名の大学院生が在籍しております。写真後列の5名が大学院生です。左からDr. Putri Pramita Larasati, Dr. Witsanu Yortchan, 田中凜太郎先生、Dr. Mutiara Annisa, 小林雅先生です。



写真 C412室にて。令和7年7月14日

教育について

本分野では、歯科理工学を通じて歯科臨床に欠かせない材料科学の基礎を学生に伝えることを目的とし、講義・実習の両面から教育を展開しています。対象となる歯科材料は、金属、高分子、セラミックスといった素材はもちろん、それらの複合材料や生体材料まで多岐にわたります。さらに、近年の歯科分野におけるデジタル技術の進化にも対応可能なようにCAD/CAM冠やCAD/CAMシステムに関する内容も積極的に取り入れており、現代の歯科医療の土台となる知識と技術を教授します。これらの幅広い材料特性や、器械・器具の取り扱いについて学ぶことは、歯科医療現場における基礎的素養を身につけるうえで不可欠です。本分野では、将来の医療機器や材料の進歩に柔軟に対応できる力を育むため、自然科学の知識を基盤に据えながら、臨床との密接なつながりを意識した教育を目指しています。講義科目としては歯学科2年生対象の「歯科理工学Ⅰ」（有機材料・高分子材料・無機材料）と「歯科理工学Ⅱ」（金属材料および材料特性）、そして実習科目である「生体理工学Ⅰ」（各種歯科材料の物性評価）を、私と金谷先生が担当しています。3年生には、「生体材料学」の一部（精密鑄造、力学、切削加工等）および「早期臨床実習Ⅱ」の一部を指導しており、大学院生には「生体材料学」や「生体組織再生工学」の特論・演習を提供しています。授業では、教室独自に製本した歯科理工学資料を学生に配布し、自学自習に役立ててもらっています。基礎講座の内容は臨床科目よりも先行して学ぶため、低学年からの理解が重要です。実際、臨床実習に取り組む中で基礎の大切さを改めて認識する学生も少なくありません。こうした学生が実習後の復習にも活用できる教材として、テキストが力になることを願っています。現在の歯学科学生の中には、歯科治療を受けた経験がない人も多く、経験済みの学生でも、治療の流れを理解していない学生は多いです。そのため、学生が日常診療と材料の関連性を意識し、学習への関心を持てるよう教員と学生との間の知識のギャップを意識した丁寧な講義・実習を心がけています。

研究について

教員2名で多岐に渡る内容の研究を行っております。

①低エネルギー電子線照射がCAD/CAM冠用コンポジットレジンとの接触角、接着強さと破壊様式に与える影響：近年のデジタル歯科領域で最も広まったもののひとつにCAD/CAM冠があります。保険診療の枠も拡大しました。CAD/CAM冠と支台歯の接着を向上させる視点を接触角に求め、低エネルギー電子線照射が有効であることを突き止めました。そこで、接着強さとの関連性を、破壊様式を含めて解析を進めています。

②普通石膏と硬質石膏の硬化膨張圧に関する研究：硬化膨張を含めて石膏の物性については、歯科技工士さんをはじめ歯科医療に関係するスタッフが日常最も目にして、手に触れる歯科材料であるにもかかわらず、実のところあまりわかっていないことが多い領域です。たとえば硬化膨張“率”に関する研究は非常に多く行われてきましたが、そのいっぽうで硬化膨張“圧”に関する研究はほとんど行われてきませんでした。この、本当は重要な意味を内在している硬化膨張“圧”という物性の解明を行っています。

③ヒト口腔粘膜作製プロトコールの改変：現在私たちは、CollaWindシートという魚うろこコラーゲン製材の片面に、結合組織乳頭様構造を生体模倣して、3次元的な微細波上構造が付与された足場材を培養口腔粘膜の作製に用いています。作製工程で細胞と足場材の接着を強固にするために、他分野、他大学の先生方との共同研究によって種々の戦略を駆使してよりヒトの口腔粘膜に近い培養口腔粘膜の作製に取り組んでいます。この戦略は、インプラント治療におけるムコインテグレーションの確立にもつなげることができるので、チタンと細胞接着の技術向上にも結び付けていきます。

④インビトロ創傷治癒モデルの開発：皮膚に比べて、口腔粘膜の傷は早く治るといわれています。この現象を細胞生物学的により詳細に解析することで、皮膚の新規創傷治療につなげることが可能になります。そのためには、まず口腔粘膜の

細胞を用いたインビトロモデルの作製が必須です。これまでの培養口腔粘膜作製の基盤技術を展開して、だれもが手掛けることのできるプロトコルを開発しています。

⑤患者由来ヒト口腔がん関連線維芽細胞を組み込んだ口腔がんインビトロモデルの応用研究：口腔がん関連線維芽細胞（CAF）の細胞培養に成功して以来、その細胞を3次元口腔がんモデルに組み込んで、さまざまながんの浸潤動態研究、がんの治療法開発へ応用していきます。

⑥口唇についての組織学的研究：民間企業との共同研究を展開し、上がった成果をリップクリームの性能・効果の向上につなげたいと考えています

以上を2名の教員と5名の現役大学院生で実施しています。

本分野は、材料試験機（万能試験機）、微小硬さ試験機、走査型プローブ顕微鏡（SPM）、フーリエ変換赤外分光装置（FT-IR）、チタン鋳造機を保有しております。様々な分野の先生方にご使

用いただいて構いませんので、必要な際はお声掛けいただけますと幸いです。

おわりに

材料科学と歯科臨床との橋渡しをするべく、学内外の研究者の皆様との協力を得て、歯科臨床の発展に寄与して参りたいと考えます。このような研究テーマを中心に国際学会における発表の機会を通し、既存の海外ネットワークを利用して国際舞台の場で活躍出来る人材の育成にも取り組んでおります。また、共に研究し、学ぶ、開かれた研究室であり続けることを心がけ、意欲ある若人の志願も歓迎しますのでよろしくごお願い申し上げます。一方、教員2名の定年が間近であるため、3年後には教官不在となり、教室存続の危機が迫っております。今後、学生教育と教室の研究に支障のないように努力して参ります所存ではございますが、当分野を担う人材の発掘に関しまして、若手の先生方のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



学会受賞報告

日本老年歯科医学会優秀論文賞

日本老年歯科医学会 優秀論文賞受賞報告

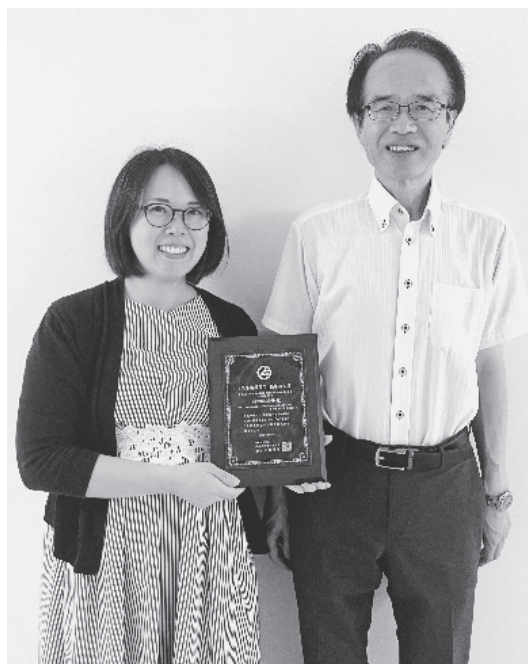
口腔生命福祉学講座口腔保健学分野 小田島 あゆ子

この度、日本老年歯科医学会 第36回学術大会において優秀論文賞を受賞いたしましたので、ご報告いたします。受賞論文は「地域在住高齢者における咬合と頭部を含む身体動揺との関連」です。

高齢者における転倒やフレイルの予防には咬合力の維持・改善が重要であることが報告されています。しかし、咬合力が身体動揺に与える影響のメカニズムについては解明されていません。そこで本研究では高齢者の頭部の動揺に着目し、地域在住高齢者の重心動揺、腰部および頭部動揺を三次元的に解析し、咬合力および咬合状態との関連を明らかとすることを目的としました。その結果、咬合力が低い高齢者は咬合力が高い高齢者と

比べて、非咬合状態の頭部動揺が大きく、咬合状態においては一部の方向を除いて差は認められませんでした。この結果は非咬合状態では咬合力が高い高齢者は頭部が安定していること、さらに咬合によって頭部の動揺を抑えられている可能性が示されました。今回の受賞を励みにし、今後も高齢者の健康に寄与できるように研究を進めてまいります。

最後になりましたが、本研究の遂行においてご指導を賜りました葭原明弘教授をはじめ、新潟医療福祉大学の久保雅義教授および石上和男名誉教授、数多くのご助言いただきました包括歯科補綴学分野の堀一浩教授ならびにご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。



Report of academic conference award

Division of Preventive Dentistry Olenka Yomira VALENZUELA TORRES

It was a great privilege to be recognized with the Best Presentation Award at the Niigata University Doctoral Student Support Program Symposium for my presentation entitled “*Presence of Metabolic Syndrome and Periodontal Inflammation on the Surface Area of the Japanese Elderly.*”

My research was a longitudinal study investigating the association between metabolic syndrome (MetS) and changes in periodontal inflamed surface area (PISA) among Japanese elderly individuals. Data from 268 dentate participants aged 80 years and older were analyzed. Metabolic syndrome was diagnosed based on the revised criteria proposed by the Department of Endocrinology at Niigata University.

As a result, among elderly individuals with 10 to 19 teeth, the presence of MetS was significantly associated with an in-

creased risk of periodontal inflammation progression over two years. This association was not observed in those with fewer or more teeth. Furthermore, those who had lost teeth exhibited severe periodontal disease, with teeth showing high PISA scores. Therefore, people with a moderate number of teeth may be particularly vulnerable to the adverse effects of MetS on periodontal health.

This award represents a significant milestone in my academic career and has inspired me to forge ahead and continue dedicating great enthusiasm to each of my projects. I would like to extend my deepest gratitude to my supervisors, Professor Hiroshi Ogawa, Professor Kaname Nohno, and especially to Dr. Kumiko Minagawa, for her invaluable guidance and constant support throughout my research.



Group photo at the conference venue. The author is second from the right.

第22回日本歯科医学教育学会優秀論文賞 第20回日本シミュレーション学会一般演題優秀賞 受賞報告

歯科麻酔学分野 岸本直隆

この度、第22回日本歯科医学教育学会・優秀論文賞、第20回日本医学シミュレーション学会学術集会・一般演題優秀賞を受賞しましたので報告します。これらは歯科治療中の患者急変に関するシミュレーショントレーニングの教育効果を評価した研究、およびその結果をまとめた論文 (Kishimoto N et al. *Eur J Dent Educ.* 2024 ; 28 : 689-697.) に対して授与されました。

超高齢社会を迎え有病高齢者が多数、歯科を受診する時代となり、歯科医師が治療中の患者急変に遭遇する機会が増えています。私たちは歯科麻酔科医としての特性を生かし患者急変時、適切に対応できる歯科医師の育成を目的としたシミュ

レーショントレーニングを提供しております。本研究では、シミュレーションを受講した歯科医師の急変診断や治療に関するスキルが、どれくらいの期間維持されるかを評価しました。受講後のスキル低下を避けることは困難ですが、シミュレーションの再受講によりスキル維持が可能になることで、いつ起こるかかわからない患者急変に対しても適切に対応できる歯科医師が増えると期待しております。本研究に協力頂きました、歯科麻酔学分野 前教授・瀬尾憲司 先生、氏田倫章 先生、長崎大学歯科麻酔学分野・教授 讃岐拓郎 先生に心より感謝申し上げます。



筆者 受賞の楯と賞状とともに

日本歯科麻酔学会 最優秀発表賞 受賞報告

歯科麻酔学分野 沢田 詠見

この度、日本歯科麻酔学会学術集会において、基礎研究部門・口頭発表における「最優秀発表賞」を受賞いたしましたので、ご報告申し上げます。

研究テーマは、「損傷した末梢神経の軸索再生によるニューロン中枢側への信号付加の有効性」です。本研究では、マウス下歯槽神経損傷モデルを作成し、延髄に人工シナプスオーガナイザーを投与することで、損傷末梢神経の感覚回復や中枢におけるシナプス変化を明らかにしました。損傷部位そのものへの直接的なアプローチではなく、中枢側からのアプローチを試みる新しい視点に基

づくものです。

今回、このような賞をいただけたことを大変光栄に思うとともに、研究を支えてくださった多くの方々に心より感謝申し上げます。この受賞を励みとし、今後もさらに研究を進め、成果を社会に還元できるよう努めてまいります。

最後に、本研究を進めるにあたりご指導いただきました瀬尾憲司先生、前田健康先生、照沼美穂教授、ならびに武内恒成教授、そして歯科麻酔学分野の先生方に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。



瀬尾先生と授賞式にて（著者：左）

日本摂食嚥下リハビリテーション学会 優秀論文賞 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 辻 村 恭 憲

この度、日本摂食嚥下リハビリテーション学会優秀論文賞を受賞しましたので、ご報告させていただきます。

受賞論文は“Chewing Well Modulates Pharyngeal Bolus Transit During Swallowing in Healthy Participants”というタイトルで、2024年にDysphagiaに掲載されました。歯科臨床においては補綴治療後などに、「よく噛んで食べてください」などと説明することがあると思います。これまでに、“よく噛む”ことが肥満や生活習慣病を予防すると報告されてきました。本研究では、日本人に馴染みのある食品である米飯を用いて、“よく噛む”という指示が嚥下動態に与える影響を調べました。“よく噛む”ことによる嚥下中の食塊咽頭通過に対する効果は一口量で異なり、特に多量では“よく噛む”

ことで嚥下時の食塊量が多くなり咽頭通過時間が延長することがわかりました。このことから一口量が多いと、“よく噛む”場合でも嚥下時に咽頭への負荷が大きくなってしまう可能性があると考えられます。

固形物を安全に食べることの実現には口腔機能が重要であり、咀嚼を含めた口腔機能に着目した研究を行うことで、歯科から栄養改善やQOL向上に貢献して医科歯科連携を促進できると期待しています。

最後になりますが、研究をご指導くださった摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授、筆頭著者の大久保明先生、実験に協力してくれた医局の先生方、被験者の皆様に、改めて御礼申し上げます。

全国歯科大学・歯学部 若手歯科医師臨床症例発表会 優秀賞 受賞報告

7th International Conference on Food Oral Processing, Physics, Physiology and Psychology of Eating Wiley Best Poster Presentation Award 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 相澤 知里

この度、若手歯科医師臨床症例発表会において優秀賞を、スペインで開催されました7th International Conference on Food Oral Processing, Physics, Physiology and Psychology of Eating (FOP) においてWiley Best Poster Presentation Awardを受賞いたしました。

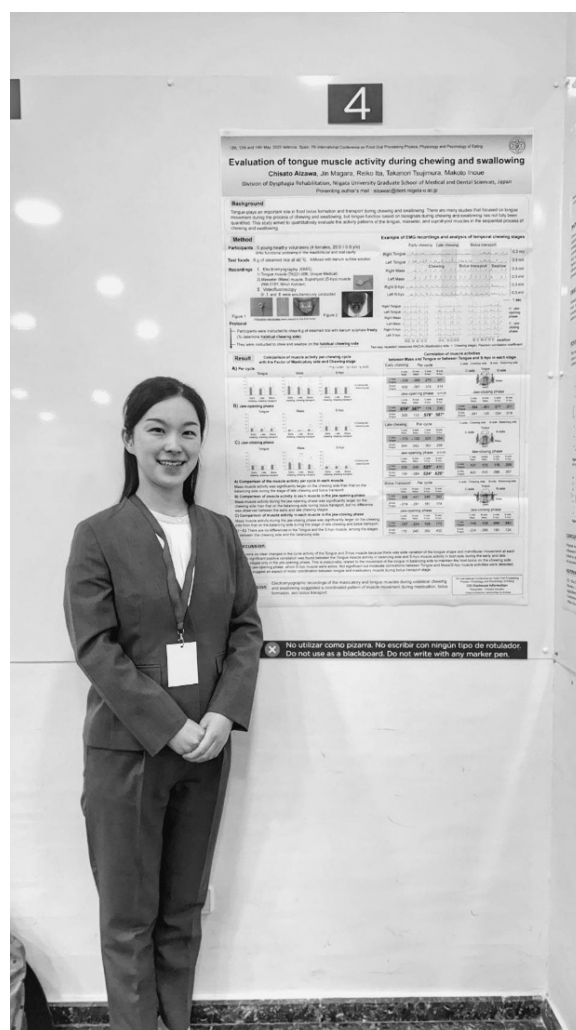
若手歯科医師臨床症例発表会は、日本歯科医師会の主催でこの度初めての開催となりました。私は「舌腫瘍術後の再建皮弁形態変化を伴う摂食嚥下障害に対して舌接触補助床で対応した症例」と題し、舌垂全摘出術、皮弁再建術後の再建皮弁形態や運動機能の変化に応じPAPを調整し摂食嚥下機能の改善を図った症例を報告しました。

またFOPでは、“Evaluation of tongue muscle activity during chewing and swallowing”をテーマに米飯の咀嚼嚥下過程における舌筋、咀嚼筋の活動パターンの定量的評価を目的とした実験を行い、各筋の協調した運動パターンを示すことができました。

大学で学ぶ者として臨床と研究を両立すべく模索する日々の中で、この度の受賞は大きな励みとなりました。

結びにあたり、日頃よりあたたかいご指導を賜っております井上誠教授、真柄仁先生、辻村恭憲先生をはじめ、すべての先生方に心より感謝申

し上げます。



FOPポスター会場にて

日本顎口腔機能学会2024年度奨励賞 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 板 離 子

この度、日本顎口腔機能学会2024年度奨励賞を受賞致しましたのでご報告致します。私は「舌運動時の舌筋および舌骨上筋の筋活動様式の検討」を研究テーマとして、持続的な舌圧発揮時における内舌筋を含む筋活動様式について、新たに考案した吸引型表面電極を用いて筋電図学的検証を行ってきました。その結果、強い舌圧発揮時には内舌筋が急速に疲労し、その代償として主に舌骨上筋が活動することで舌圧が維持されることを明らかにしました。日々の臨床に携わる中で、摂食

嚥下障害の病態解明やリハビリテーションのエビデンスはまだ十分でないことを実感します。今回の受賞を糧に、さらに臨床家としての側面を活かして自身の研究を発展させ、実臨床への還元に貢献できる顎口腔機能研究者を目指して今後も意欲的に取り組む所存です。最後に、これまでご指導いただきました真柄仁先生、井上誠教授をはじめ、研究にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。



指導医、先輩、後輩と記念に（筆者は左から2番目）

第54回公益社団法人日本口腔インプラント学会学術大会 「優秀研究発表賞」、 35th ANNUAL SCIENTIFIC CONFERENCE SEAADE “BEST ORAL PRESENTATION AWARD”、 「令和6年度新潟大学学長教育賞」受賞報告

生体歯科補綴学分野 秋葉陽介

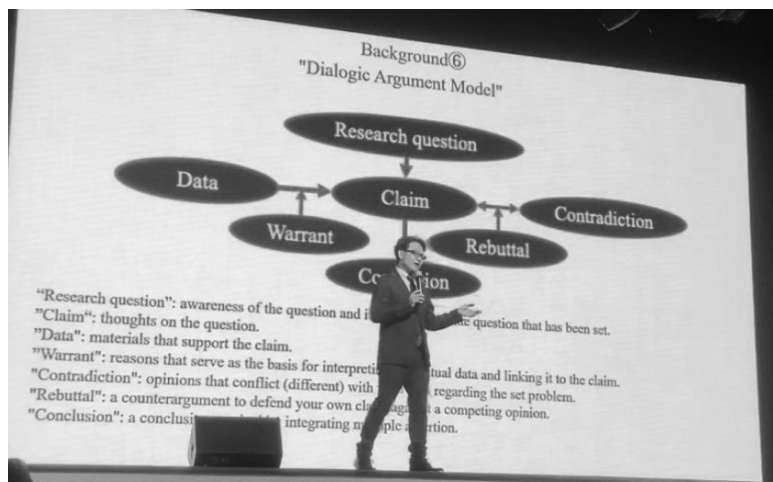
このたびいくつかの賞を受賞したので報告させていただきます。

第54回公益社団法人日本口腔インプラント学会学術大会におきまして「優秀研究発表賞」を受賞いたしました。演題は「無構造ナノレベル超平滑チタン表面を使用した血中チタン接着タンパク質探索を基点としたオッセオインテグレーション機構解明」です。台湾成功大学工学部、新潟大学口腔生化学分野との共同研究であり、照沼美穂先生のご指導、ご協力に感謝申し上げます。

また、35th ANNUAL SCIENTIFIC CONFERENCE Southeast Asia Association for Dental Education (SEAADE) 2024ではBEST ORAL PRESENTATION AWARDを受賞いたしました。演題は「Logical thinking training

and dental clinical reasoning training」で、6年次で実施している歯科臨床推論演習について、カリキュラム構築理論と教育効果の検証を行い、報告しました。さらに新潟大学からは「令和6年度新潟大学学長教育賞」をいただきました。「知識構成型ジグソー法による専門講義科目の能動的学習化」として、3年次の歯冠修復学において、総論講義の代わりに実施している「知識構成型ジグソー法」演習の教育効果検証を行い、教育研究として報告しました。これらの教育研究には、小野和宏先生、斉藤有吾先生、丹原惇先生から多くの助言を賜り、感謝申し上げます。

そして、研究グループの秋葉奈美先生、江口香里先生、竹内陽香先生、Ochoa Escate Dagny先生の協力にも感謝しております。



35th ANNUAL SCIENTIFIC CONFERENCE SEAADEにて

日本歯科医学教育学会 受賞報告

生体歯科補綴学分野 長 澤 麻沙子

この度、第15回日本歯科医学教育学会におきまして国際学会優秀発表奨励賞を受賞いたしましたのでここに報告申し上げます。本研究のタイトルは“Educational effects on technical skills of crown preparation using virtual reality and augmented reality devices.”です。The 33rd South East Asia Association for Dental Education Annual Scientific Meeting (SEAADE：東南アジア歯科医学教育学会)で発表を行いました。昨今、我々が避けて通ることができないデジタル化ですが、歯科教育の現場でも同じです。デジタル化は目的ではなく、目標を達成するための手段でなければなりません。今回我々は新潟大学歯学部が所有する歯科教育用のVR (Virtual Reality) マシンとAR

(Augmented Reality) マシンを用いて、どのようにそれらを用いることが歯科技能教育向上に役立てられるかを検討しました。内容の詳細は歯学部ニュースの前回号(令和6年度第2号(通算146号))を是非ご覧ください。新潟大学歯学部のデジタルデンティストリーの取り組みが特集されています。歯科医学教育における研究は重要で、それは大学の使命でもあります。今後も高い臨床能力を有する歯科医師を新潟大学歯学部より輩出するために、引き続き医学教育の研究を進めて参ります。最後に歯科医学教育の在り方のコンセプトや研究をご指導ご鞭撻くださいました魚島勝美名誉教授に感謝の意をお伝えするとともに、ご協力くださいました全ての先生方に心より御礼申し上げます。



令和6年度 日本補綴歯科学会 奨励論文賞 第134回日本補綴歯科学会学術大会 課題口演賞 受賞報告

生体歯科補綴学分野 小野 喜 樹

このたび、日本補綴歯科学会第134回学術大会において、令和6年度奨励論文賞および課題口演賞を受賞致しましたので御報告申し上げます。

受賞論文名は“Wnt/ β -catenin Promotes Cementum Apposition in Periodontal Regeneration”で、『Journal of Dental Research』に掲載され、幸運にも同誌の表紙にも採用されました。本論文では、マウス臼歯の腎被膜下移植による歯周組織再生モデルを用いて、再生歯周組織における網羅的遺伝子発現解析と、誘導性に各種シグナルを制御することが可能な遺伝子発現マウスを用いることで、Wnt/ β -cateninシグナルがセメント質の形成を制御することを明らかにしました。

また、第134回日本補綴歯科学会学術大会では、「細胞増殖活性に基づく新規歯根膜幹細胞の同定」という演題で発表し、課題口演賞を受賞しました。この研究では、幹細胞分化と細胞増殖活性との緊密な相関関係に着目し、歯根膜組織内の細胞増殖活性を様々な細胞標識を駆使して解析することで、歯根膜幹細胞の組織内局在の探索を試みました。その結果、従来は主に骨近傍の血管周囲に局在すると考えられていた歯根膜幹細胞が、セメント質近傍にも存在することを示唆する結果を得ることができました。

最後に、本研究の遂行にあたり御指導賜りました加来賢准教授、研究グループと分野の先生方に心より厚く御礼申し上げます。



補綴歯科学会にて加来准教授と（筆者は左）

第6回日本結合組織学会若手セミナー 優秀発表賞受賞

生体歯科補綴学分野 小林 水輝

この度、令和7年6月に開催されました第6回日本結合組織学会若手セミナーにおいて、優秀発表賞を受賞させて頂きましたので、ご報告申し上げます。受賞演題名は『TGF- β がヒト歯根膜細胞に及ぼす影響の解析』です。

歯根膜（PDL）は歯と歯槽骨を繋ぐ結合組織であり、咀嚼機能の維持に不可欠です。PDLの再生には様々な方法が試みられていますが、未だ有効性の高い治療法は確立していません。トランスフォーミング増殖因子 β （TGF- β ）は歯根膜細胞（PDLCs）の遊走・増殖・分化に關与する重要なサイトカインであり、PDL組織再生に有効な役割を持つ可能性が示唆されています。本研究では、ECMプロテオミクスと網羅的遺伝子発現解析の手法を用いて、PDLCの細胞外マトリックス（ECM）産生と線維形成に対するTGF- β の

特異的作用を明らかにすることを目的としました。

解析結果より、TGF- β 処理によりPDLCのECM産生は亢進され、得られたECMの構成はPDL組織本来の特性と酷似していることが明らかとなりました。本成果は、PDL組織再生法の開発においてTGF- β が有望な治療因子である可能性を示唆しています。今後はin vivoでの実験を通してTGF- β 添加PDLCを用いた移植基材の開発を目標とし、さらなる研究を進めて参ります。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり多大なるご指導を賜りました加来賢准教授をはじめ、本研究にご協力いただきましたすべての先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

追悼 監物新一技術職員

硬組織形態学分野 大島 勇 人

監物新一技術職員が、かねてより病氣療養中のところ、2024年10月19日にご逝去されました。享年65。お酒と煙草をこよなく愛し、皆から「監さん」の愛称で慕われた生涯でした。

監物さんは1987年4月、歯学部口腔解剖学第一講座（現・硬組織形態学分野）の技官として着任され、人体解剖学実習担当、そして透過型電子顕微鏡の試料作製を通して、2001年まで小澤英浩先生の研究室を支えられました。2002年に私が教授に着任してからは、2020年3月に60歳で定年を迎えられるまで、人体解剖学実習をはじめとする歯学部の教育、研究の技術基盤を担い、さらには研究機器の管理を一手に引き受けるなど、多岐にわたって私の研究室を支えてくださいました。本稿では、親しみを込めて「監さん」と呼ばせていた

できます。

私が大学院に進学したのが1987年ですので、監さんと私は同じ年に歯学部でキャリアをスタートさせたことになります。私が本分野に異動してからの20年近くは、直接私の研究を支えていただくことになりました。監さんは透過型電子顕微鏡の試料作製を得意とされ、その卓越した技術は研究の強力な支えとなったほか、パラフィン切片作製、 μ CTや電子線マイクロアナライザ（EPMA）の試料作製においても、研究室に大きく貢献してくださいました。監さんとの共著論文は、*J Dent Res*, *Cell Tissue Res*, *Histochem Cell Biol*, *J Histochem Cytochem*, *J Periodontol*などの著名な学術誌に掲載され、14編を数えます。



監さんは非常にざっくばらんで、天真爛漫、自由奔放な人柄でした。常に人生を楽しむその姿は研究室の雰囲気をも明るくしてくれましたが、一方で私と意見がぶつかることもしばしばありました。情に厚く、細やかな気遣いのできる方で、教授から大学院生まで誰とでも隔てなく接することができるため、私の共同研究者や大学院生たちともすぐに打ち解けておられました。その一方で、人前で話したり、注目されたりするのは苦手なようでした。写真を撮られるのを嫌がったため、研究室のアルバムの中から監さんの姿を探すのは一苦勞です。掲載した写真は、研究室の花見での一枚。いつもの、少しばかりかしこまった表情です(笑)。

監さんは、小澤英浩先生を心から尊敬し、慕っておられました。私が教授に就任した当初、「小澤先生は…でしたよ！」と、偉大な小澤先生を幾度となく引き合いに出されるのは、新米教授であった私には少々辛い思い出です。小澤先生が研究室にお見えになった際に、監さんが実に生き生きとお世話をされている姿を見て、先生のことが

本当に好きだったのだなと改めて感じたものです。その小澤先生が2023年2月2日にご逝去され、監さんも後を追うかのように彼岸に旅立たれました。

昨今の大学は、人員削減の波のなかで、一人ひとりが抱える業務が増え、監さんのような自由な方を許容する余裕がなくなってしまったのかもしれない。定年間近には私とぶつかる回数も増え、私が自らの考えを押し通そうとするあまり、監さんはそんな私に愛想を尽かされたのか、定年を機に研究室を去ることになりました。監さんが研究室を去られて5年。仕事に追われ、物事が滞りがちな現在の状況を鑑みるに、監さんの貢献がいかに大きかったかを今更ながら痛感しております。「先生、俺のありがたみがやっと分かったかい？」と、天国で小澤先生と笑っている監さんの顔が目に浮かびます。「はい、参りました。今まで本当にありがとうございました。安らかに眠りください。」

合掌



新潟歯学会報告

令和7年度 第58回新潟歯学会総会および第一回例会報告

令和7年度新潟歯学会集会幹事
予防歯科学分野
竹原祥子

第58回新潟歯学会総会を4月12日（土）に歯学部講堂において開催致しました。当日は、学内外より合計93名の会員の先生方にご参加いただきました。総会では、冒頭に井上誠会頭よりご挨拶を

賜ったのち、会務報告、令和6年度会計決算報告および会計監査報告が行われました。続いて、令和7年度の事業計画案および予算案について審議され、いずれも承認されました。併せて、前・高



写真1 新潟歯学会賞授与 相澤有香先生（左）と新潟歯学会会頭 井上誠先生



写真2 新潟歯学会奨励賞授与 滝澤史雄先生（左）と准講会幹事 中村健先生



写真3 特別講演 杉本昌弘先生（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）

度口腔機能教育センター教授の前田健康先生が、名誉会員として承認されました。また令和6年度新潟歯学会賞は生体組織再生工学・顎顔面口腔外科学の相澤有香先生（写真1）に、新潟歯学会奨励賞は歯周診断・再建学の滝澤史雄先生（写真2）にそれぞれ授与されました。

議事終了後、9題の一般口演が行われ、各演題において活発な質疑応答・討論が展開されました。午後からは、慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科の杉本昌弘先生を講師にお迎えし、「唾液中の代謝成分は新たなバイオマーカーになり得るか？」と題する特別講演が行われました（写真3）。唾液中代謝物に関する最新の研究成果

や、各種疾患に対するバイオマーカーとしての応用可能性など、極めて示唆に富んだご講演を賜りました。

7月12日（土）には第1回例会を、同じく歯学部講堂にて開催いたしました。合計98名の会員の先生方にご参加頂き、一般口演11演題の発表に引き続き、吉羽永子先生（口腔生命福祉学講座）による「大学で働くということー 発展する歯学部の中で学生・教職員がハッピーになるためにー」と題した教授就任講演が行われました。（写真4）

第2回例会は11月8日（土）に開催予定です。詳細は新潟歯学会ホームページをご覧ください（<https://sksp.jp/nds/index.jsp>）。



写真4 第一回例会 教授就任講演 口腔生命福祉学講座 吉羽永子先生



同窓会だより

広報名簿部 部長 加藤 幸生
(歯学科29期)
小田島 あゆ子
(口腔生命福祉学科2期)

2025年度も同窓会としての活動が始まりました。前号からの同窓会の活動内容についてご紹介いたします。

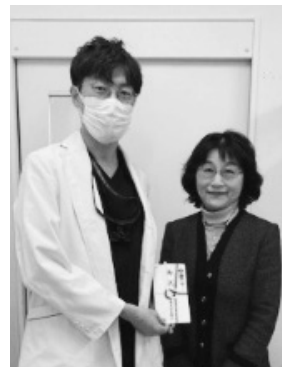
●退職された先生へのお祝い

3月で退職された前田健康教授（高度口腔機能教育研究センター、歯学科14期生）、川瀬知之准教授（歯科薬理学分野、歯学科15期生）、小林哲夫准教授（歯科総合診療科、歯学科17期生）、5月末で退任された瀬尾憲司教授（歯科麻酔学分野、歯学科16期生）に同窓会よりお祝いを贈呈いたしました。先生方のご健勝を祈念しております。



●新任教授へのお祝い

2024年11月に丹原惇先生（歯学科37期）が本学歯科矯正学分野の教授に、2025年4月に高橋直紀先生（歯学科36期）が北海道大学大学院歯学研究院歯周病学教室の教授に就任されました。先生方のご活躍を祈念しております。



●卒業生のネームプレート設置

新潟大学歯学部の卒業生のネームプレートが設置されているのはご存じですか。歯学部4階、医歯学総合病院へ向かう渡り廊下に設置されています。2025年3月には歯学科55期生（50名）、口腔生命福祉学科18期生（25名）が卒業し、新たな一枚が設置されました。同窓生の繋がりを確認することができますので、歯学部を訪れる際にはぜひご覧ください。



●口腔生命福祉学科の卒業後の進路

口腔生命福祉学科では歯科衛生士と社会福祉士の2つの国家試験の受験資格を取得できます。1年次では教養科目、2年次からは歯科の専門科目、3年次からは福祉の専門科目が加わり、4年次では歯科および福祉の実習と卒業論文があります。歯科と福祉の両方を学ぶことによって将来の選択肢が広がる一方で、自分が目指す方向性に悩む学生も少なくありません。今回は口腔生命福祉学科の卒業後の進路についてご紹介したいと思います。

口腔生命福祉学科の卒業生の進路は就職が約9割と多く、行政（福祉・歯科衛生士・一般）、病院（歯科衛生士・医療ソーシャルワーカー）および歯科診療所への就職がほとんどを占めます。その他の就職先は福祉施設や企業（歯科・その他）などがあります。行政や病院への就職を希望する場合、歯科または福祉を選択する必要がありますが、両方の専門知識をもって地域住民の生活を支えることができるのは口腔生命福祉学科の卒業生ならではの特徴です。新卒で歯科または福祉のど

ちらかを選択したとしても、その後の転職で専門分野を変更した卒業生もいます。学生時代は同級生として横の繋がりが強いのですが、卒業後はそれぞれの専門分野に分かれるため同窓生としての縦の繋がりに助けられることもあります。自分と異なる専門分野の同窓生の話はとても刺激で、自分も頑張ろう！とモチベーションが上がります。

また、卒業後は進学する学生もいます。医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻では博士前期課程は2年間、博士後期課程は3年間の研究活動を行い、学位論文を完成させます。研究に専念する一般の大学院生、または日中は社会人として仕事をしながら勤務後や休日に研究する社会人大学院生という選択肢があります。大学院には長期履修制度がありますので、社会人と大学院生の両立も可能です。

口腔生命福祉学科の卒業後の進路について、いかがだったでしょうか。同窓生の情報を参考にしつつ、学生の皆さんが4年間の大学生活で学んだことを糧に自分の道を切り開いていただければ、これからも応援しています。

歯学部を支える方々

知の総和

歯学部事務室長 吉田 誠 司

令和7年4月より、歯学部事務室長を拝命しました吉田誠司と申します。

今回は、この場をお借りして、あまり知られていないであろう、国立大学を巡る現況について概観しつつ、事務室像について述べたいと思います。

2025年2月、国の中央教育審議会において『我が国の「知の総和」向上の未来像』と題した答申が発出された。答申においては、2040年に、日本の大学進学者が現在の約7割の46万人余りとなる推計も示された。人口減社会を見据え、それでもなお知の基盤を維持するためには、一人一人の能力を引き上げることで、人口が減っても総和とし

ての「知の基盤」は維持できるとの未来像である。

国立大学は、2004年、民間の経営手法の導入を念頭に、護送船団方式からの決別を目指し法人化された。各国立大学が評価を競い合い、国立大学の多様性が広がりつつある今、法人化によって、大学機能のうち、「社会貢献」が国立大学においても強く意識されるようになったのではないか。大学の機能とは、「知を創造・探求し（研究）」、「得た知見を教授し（教育）」、「広く社会へ発信し、社会の発展に寄与する（社会貢献）」ことであり、医歯系ではさらに「診療」機能も担う。法人化以前は、主として研究や診療に注力していたかもしれないが、法人化により国立大学は、ステークホルダーである学生、保護者、地域などの社会との



つながりを意識せざるを得なくなり、広く社会に開かれつつあると考える。法人化によって制定された国立大学法人法第4条では、「各国立大学法人の名称及びその主たる事務所の所在地は、それぞれ別表～（中略）～に掲げるとおりとする。」とあり、新潟大学であれば「新潟」に所在することが定められ、いわば「新潟に根付くこと」が法で規定されているともいえる。

今年（令和7年）、地域に根ざした新潟大学歯学部は、創立60周年を迎え、また、大学院医歯学総合研究科は、来年（令和8年）改組を予定し、新たに大学院医歯保健学研究科となる予定である。人口減社会の中で、持続可能な歯学部であり続けるためには、地域にそして社会に必要とされる歯学部であり続けなければならない。また、知の総和を維持する社会の実現のためには、18歳人口のみならず、地域の社会人の学び直し、つまり大学院教育も今後重要となってくる。

「社会」を空間的に拡大した場合、「地域」から「国」そして「世界」へと、その対象を拡大することができる。新潟大学は、文部科学省令和6年度「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業

（J-PEAKS）」に採択された。構想では「未来社会の“脳といのち”と“食と健康”のイノベーションを創出する研究拠点」を標榜し、本学部では特に“食と健康”領域において、地域に根ざしながら、ここ新潟から国内外へ研究成果を発信していく。

新潟大学歯学部では、連綿と続く歴史をこれからも紡ぎ、地域との対話を通じて絶えず時代の要請にあった姿に形を変えながら、新潟に必要とされる存在であり続ける。

歯学部事務室においても、上司、部下、同僚、教員、学生、保護者など、関係者との対話を通じて絶えず必要な変化を加え、一人一人の職員の能力を向上することで、事務室としての総和を維持向上し、歯学部に貢献していきたい。

参考文献

- 吉見俊哉（2021）『大学は何処へー未来への設計』岩波書店
島一則（2022）『国立大学システムー機能と財政』東信堂



歯学部へ異動してきて

歯学部事務室総務係 片桐 菜那

歯学部総務係の片桐と申します。令和6年10月に工学部学務係から異動して参りました。異動初日はドクターヘリ発着の音の迫力に驚き、これまで勤務した五十嵐キャンパスとの違いを実感したことを覚えています。

総務係での業務は、最初は耳慣れない言葉や初めて触れる内容も多く、右往左往しておりましたが、歯学部のみなさまの厚いサポートのおかげで、少しずつ慣れてまいりました。

12月から3月までは、一時的に学務係にて、主に大学院関係の業務を担当させていただきました。前部署の工学部で担当していた学部学生に対する業務とは制度や対応の視点が異なり、またも右往左往しましたが、この経験は自分自身の視野を広げるとも良い時間となりました。

この4月からは再び総務係に戻り、主に伝票処

理や謝金、旅行命令など会計業務を担当しております。日々の業務の中で、先生方にメールで確認やご対応をお願いさせていただく場面も多く、お忙しい中お手数をおかけすることに恐縮しておりますが、いつも迅速かつ丁寧にご返信くださり、大変心強く感じております。

さて、仕事から離れたひとときは、愛犬と公園でお散歩&ピクニックをしたり、イベントに出かけたり、一緒にお昼寝をしたりすることが幸せでした。常にそばにいた愛犬は、先日虹の橋を渡ってしまいましたが、今も変わらず大切な存在です。今回の誌面にも、そっと思い出の写真を添えさせていただきます。

まだまだ至らぬ点多々ございますが、引き続き精進してまいりたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



愛犬「ふあいん」

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
定年退職	R7.3.31	前 田 健 康		高度口腔機能教育研究センター教授
定年退職	R7.3.31	川 瀬 知 之		歯科薬理学分野准教授
退職	R7.3.31	高 橋 直 紀		歯周診断・再建学分野准教授
退職	R7.3.31	枝 並 直 樹		う蝕学分野助教
採用	R7.4.1	田 村 光	歯周診断・再建学分野助教	タフツ大学ポスドク研究員
採用	R7.4.1	小 野 喜 樹	生体歯科補綴学分野助教	医歯学総合病院医員
採用	R7.4.1	広 瀬 尚 子	口腔生化学分野特任助手	口腔生化学分野派遣職員
採用	R7.5.1	都 野 隆 博	高度口腔機能教育研究センター助教(育休代替教員)	医歯学総合病院医員
退職	R7.5.31	瀬 尾 憲 司		歯科麻酔学分野教授
採用	R7.6.1	筒 井 雄 平	摂食嚥下リハビリテーション学分野助教	

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	R6.12.31	松川大我		医歯学系歯学部事務室学務係
採用	R7.1.14	知野弥生	医歯学系歯学部事務室学務係派遣職員	
昇任	R7.3.31	清野 暁	医歯学総合病院経営企画課長	医歯学系歯学部事務室長
任期満了	R7.3.31	河内美帆		硬組織形態学分野技術補佐員
任期満了	R7.3.31	吉田優子		医歯学系歯学部事務室総務係事務補佐員
任期満了	R7.3.31	鈴木友里絵		医歯学系歯学部事務室総務係派遣職員
任期満了	R7.3.31	知野弥生		医歯学系歯学部事務室学務係派遣職員
昇任	R7.4.1	吉田誠司	医歯学系歯学部事務室長	医歯学系保健学科事務室学務係長
異動	R7.4.1	齋藤百花	医歯学系歯学部事務室学務係	財務部財務企画課
採用	R7.4.1	加藤優希	硬組織形態学分野技術補佐員	
採用	R7.4.1	鈴木友里絵	医歯学系歯学部事務室総務係事務補佐員	
採用	R7.7.1	三浦和子	医歯学系歯学部事務室総務係事務補佐員	

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
昇任	R7.1.1	大倉直人	歯の診療科講師	歯の診療科助教
退職	R7.3.31	小林哲夫		歯科総合診療科准教授
退職	R7.3.31	兒玉匠平		義歯診療科助教
任期満了	R7.3.31	佐藤由美子		患者総合サポートセンター特任助教
任期満了	R7.3.31	山田 葵		高度医療開発センター特任助教
任期満了	R7.3.31	永田昌毅		高度医療開発センター特任教授

【看護・医療技術部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
育児休業	R7.2.8	五十田 緋奈野		東3階病棟看護師
退職	R7.3.31	桑原 清美		東3階病棟副看護師長
退職	R7.3.31	田中 華奈		東3階病棟看護師
任期満了	R7.3.31	宮島 晴香		東3階病棟看護師
退職	R7.3.31	阿部 香織		外来（歯科）看護師
昇任	R7.4.1	長谷川 健二	歯科技工部門歯科技工士長	歯科技工部門主任歯科技工士
採用	R7.4.1	石坂 菜月	東3階病棟看護師	
採用	R7.4.1	小林 萌々香	東3階病棟看護師	
採用	R7.4.1	鈴木 弥桜	東3階病棟看護師	
採用	R7.4.1	中善寺 望	東3階病棟看護師	
採用	R7.4.1	松田 一樹	東3階病棟看護師	
所属換	R7.4.1	山野井 敬彦	歯科技工部門歯科技工士	歯科技工部門歯科技工士長
所属換	R7.4.1	佐藤 弘美	東3階病棟副看護師長	西11階病棟副看護師長
所属換	R7.4.1	津田 典子	看護管理室看護師	東3階病棟看護師
所属換	R7.4.1	名塚 恵理香	外来（歯科）看護師	東8階病棟看護師
所属換	R7.4.1	坂井 優美	東3階病棟看護師	東4階病棟看護師
所属換	R7.4.1	山本 真衣	集中治療部看護師	東3階病棟看護師
所属換	R7.4.1	田邊 久美	外来（歯科）看護師	西7階病棟看護師
退職	R7.6.30	池田 佳奈		東3階病棟看護師

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	R7.3.31	矢野目 健		総務課人事係長
退職	R7.3.31	伊佐早 貴子		管理運営課契約係長
退職	R7.3.31	土田 聡美		医事課公費医療係長
昇任	R7.4.1	臼田 隆太	学術情報部情報企画課長	総務課副課長
昇任	R7.4.1	清野 暁	経営企画課長	医歯学系総務課副課長（歯学部事務室長）
昇任	R7.4.1	佐々木 葉	研究企画推進部研究推進課副課長（地域中核研究強化促進室長） （兼）専門職員（倫理審査）	基礎・臨床研究支援課臨床研究係長

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
昇任	R7.4.1	斎藤 こそえ	医事課副課長（診療）	総務部人事企画課専門職員 （新潟県地域医療推進機構魚沼基幹病院出向）
昇任	R7.4.1	渡辺 和喜	総務課職員係長	総務課主任
昇任	R7.4.1	海藤 優治	管理運営課薬品材料係長	管理運営課主任
昇任	R7.4.1	松橋 秀夫	基礎・臨床研究支援課外部資金係長	基礎・臨床研究支援課主任
昇任	R7.4.1	長谷川 広介	基礎・臨床研究支援課臨床研究係長	基礎・臨床研究支援課主任
配置換	R7.4.1	佐藤 一彦	事務部長	筑波大学病院総務部長（兼） 整備推進課長
配置換	R7.4.1	前島 一実	岡山大学病院事務部長	事務部長
配置換	R7.4.1	斎藤 俊夫	財務部財務企画課長	経営企画課長
配置換	R7.4.1	青山 由紀代	財務部財務管理課管理係長	管理運営課薬品材料係長
配置換	R7.4.1	丸山 俊	自然科学系総務課学系庶務係長	総務課総務係長
配置換	R7.4.1	宮 正晴	総務課副課長（総務）（兼） 地域医療推進係長	学務部キャリア支援課副課長
配置換	R7.4.1	媚山 奈保	総務課専門職員	総務課専門職員（医師の働き方改革）
配置換	R7.4.1	佐賀 友和	総務課総務係長	総務課専門職員
配置換	R7.4.1	佐藤 英恵	総務課人事係長	総務課職員係長
配置換	R7.4.1	稲毛 友壽	経営企画課財務企画係長	総務部労務福利課専門職員 （労務企画）
配置換	R7.4.1	及川 俊哉	管理運営課契約係長	基礎・臨床研究支援課外部 資金係長
配置換	R7.4.1	田澤 由紀子	医事課副課長（医事総括）	医事課副課長（診療）
配置換	R7.4.1	井部 達也	医事課専門員（医療福祉）（医療福祉 支援室長）（兼）患者支援係長	医事課副課長（医事総括）
配置換	R7.4.1	目黒 恵美	医事課医事総括係長	医事課専門職員（がん診療）
配置換	R7.4.1	木津 孝明	医事課入院係長	医事課患者支援係長
配置換	R7.4.1	戸松 真紀	医事課公費医療係長	医事課入院係長
配置換	R7.4.1	深谷 賢志	医事課専門職員（がん診療）	経営企画課財務企画係長
配置換	R7.4.1	中澤 文子	医事課主任	医事課医事総括係長

編集後記

編集作業自体が初めての経験でした。右も左もわからないスタートでしたが、大島編集長をはじめ、他編集委員の先生方の手厚いサポートに支えられてなんとか形にさせていただきました。ありがとうございました。なにより、ご多忙の中、快く原稿をお引き受けくださった皆様に心より御礼申し上げます。編集・校正を通じて誌面づくりの難しさ・やりがいを実感しました。誌面には至らぬ点もあるかと思いますが、温かい目で見えていただければ幸いです。

顎顔面口腔外科学分野 隅田 賢正

編集委員を務めるにあたり過去にさかのぼってこれまでのアーカイブを見てみました。歯学部歴史を振り返ることができたり、当時は関わりが薄くあまり気に留めなかった先生方や学生さんの記事を読み再発見があったり、自分の記事を見つけて恥ずかしくなったり…。時が経過してから改めて読み直す面白さを知り、これからも歯学部ニュースを通じて時々歯学部を振り返ろうと思いました。素敵な気付きを与えてくださり感謝しております。そして、何よりお忙しい中執筆をお引き受けいただいた皆様、誠にありがとうございました。

組織再建口腔外科学分野 竹内 涼子

この度、初めて編集委員を務めさせていただきました。はじめに、原稿執筆をご快諾いただいた皆様に感謝申し上げます。寄稿してくださった学生さんをはじめ、関係各所の皆様のお力添えもあり、無事今年度も発刊することができました。公式の広報誌となると少し堅苦しい印象を抱かれるかもしれませんが、歯学部ニュースには歯学部に関わる皆様のさまざまな想いが詰まっており、それを改めて感じさせていただくいい機会になったと思います。今後も本誌の発刊が末永く続くことを願います。

顎顔面放射線学分野 高村 真貴

この度、歯学部ニュース147号の編集長を務めさせて頂きました。個人的には久しぶりの編集でしたが、改めて、教職員や学生、留学生の思いを筆の力で感じさせていただきました。毎日大量に流れてくる情報を倍速で聞き流しながら、目は別のものを追っているような現代ですが、このような冊子が長年続いてきた意味を、深く考えさせられるよい機会を与えていただきました。大学入試の面接では、聞きかじりの大学情報を口にする受験生が多いですが、是非この歯学部ニュースも受験生の目に留まるようなホームページの構成にさせていただければと思います。最後になりましたが、お忙しい中、原稿執筆をご快諾いただきました先生方、職員の方々および学生さん、編集に携わってくださった編集委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

小児歯科障がい者歯科 大島 邦子

歯学部ニュース

令和7年度第1号（通算147号）

発行日 令和7年10月1日
発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 大島 邦子、林 孝文
編集委員 隅田 賢正、竹内 涼子
高村 真貴
印刷所 (株)ウイザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ：

撮影地：ロンドン（ロンドン・アイ）

撮影日：2025年6月

使用機材：OLYMPUS PEN-F/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

撮影設定：絞り F4、シャッター速度 1/60秒（絞り優先AE、露出補正 -0.3）、ISO感度 640

裏表紙の撮影データ：

撮影地：ロンドン（大英博物館）

撮影日：2025年6月

使用機材：OLYMPUS PEN-F/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

撮影設定：絞り F4、シャッター速度 1/80秒（絞り優先AE）、ISO感度 1600

コメント：今号では、「ボケ」表現について少しご紹介いたします。

「ボケ (bokeh)」は「ぼかし」に由来する日本発の概念および語彙で、1990年代後半から世界的に知られるようになりました。現在では英語でも「bokeh」と表記され、国際的な写真用語として定着しています。ピントの合っていない部分に美を見出すという、日本人独特の感性が、グローバルに受け入れられた一例と言えるでしょう。

表紙には、ロンドンを象徴する観光車「ロンドン・アイ」を被写体を選びました。この一枚は、ロンドン名物の2階建てバス「ダブルデッカー」の走行中に撮影したものです。偶然、カメラの前面ダイヤルが動いていたことで、アートフィルター「ジオラマ」が適用され、思いがけない効果が生まりました。このフィルターは、画面中央のシャープさを保ちつつ、上下を強制的にぼかすことで、風景をミニチュアのように見せる特徴があります。今回は縦構図のため、ジオラマ効果はやや控えめですが、夕暮れ時の幻想的な雰囲気は表現できたのではないかと思います。また、標準ズームレンズの広角端を使用しており、本来なら全体にピントが合う条件ですが、フィルターの効果により画面左右が幻想的にぼけ、印象的な仕上がりとなりました。

裏表紙には、大英博物館所蔵の「ルイス島のチェス駒」を取り上げました。この駒は映画『ハリー・ポッター』にも登場し、目を見開いたような独特の表情で知られています。1831年にスコットランドのルイス島で発見され、12世紀頃の作品と考えられています。撮影には、標準ズームレンズの望遠端を用い、奥の駒にピントを合わせつつ、手前の駒を意図的にぼかし、さらに駒の背面にある模様もわずかに見えるような構図を意識しました。ただし、常に多くの来館者で賑わう大英博物館での撮影は、決して容易なものではありませんでした。


本誌中の写真の使用機材

ボディ：OLYMPUS PEN-F

レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-45mm F4.0 PRO

撮影者：林 孝文



リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。